

目次

〈表紙〉 都会の中のアアシス“緑 香る里”香里中高
鎌田伸一

(同志社中学校・高等学校事務長)

辻 英俊

(株式会社上原フォートスタジオ)

〈表紙裏〉

新島 襄の言葉

中村 信博

(女子大学学芸学部特任教授)

〈口絵〉

■法人

創立150周年記念イベント

「全同志社人がつなぐ150km」

■大学

ACUCAのPresident引継ぎ式を執り

行いました

■女子大学

『医薬基盤・健康・栄養研究所(NIBIOHN)

と連携・協力の推進に関する協定を締結』

■中学校・高等学校

『岩倉祭』

■香里中学校・高等学校

聖歌隊と有志生徒によるオーケストラ演奏

■女子中学校・高等学校

「クリスマス ページェント」

■国際中学校・高等学校

中学・高校 体育祭／

2023 ハロウィン／点灯式

■国際学院

初等部：『スポーツデイ』

国際部：Chubu University collaboration

■小学校

点灯式礼拝

■幼稚園

秋の遠足～京都市動物園～／収穫感謝祭

「私の志」インタビューの2人

私の志

老舗再生に取り組むUターン社長

「正しい商売」を理想に掲げ故郷・新潟への社会貢献を志す……大橋 祐貴さん

4

ヨーグルト業界を応援する活動家

生産者・メーカーと共に「ご当地ヨーグルトの未来を創造する」……向井 智香さん

8

特集

座談会 同志社と宇宙……

足立寛和／渡辺公貴／小原克博

12

特別寄稿

Joe 誕生160年〜同志社の源流・上海〜 元大学神学部教授 本井 康博 22

コラム・エッセイ

情報化社会と記憶術 大学文学部英文学科助教 円淨 ゆり 30

共同体というケアの在り方 女子大学学芸学部音楽学科准教授 北脇 歩 31

「同志社」との出会い 国際中学校・高等学校宗教科教諭 西原ももこ 32

建物案内

寧静館（同志社大学） 33

聡恵館（同志社女子大学） 34

同志社の逸品

栄光館ファウラーチャペルのシャンデリア 女子大学 広報課 35

私の研究・私の授業

参与観察を通して大衆文化の本質を明らかにする 大学社会学部助教 マティアスヴァンオメン 37

速く走ることができる身体への興味 大学スポーツ健康科学部准教授 若原 卓 40

子どもが育つ環境創造のために 女子大学生活科学部准教授 塚田由佳里 43

中学三年生総合的な学習の時間の取り組み 女子中学校・高等学校司書教諭 加藤美穂子 46

読書につなげる国語（にほんご）の授業 国際学院初等部教諭 上里 久美 49

新刊紹介

人物叢書 中田 薫／北康宏著

安中市と同志社をつなぐ／本井康博著

クイア・シネマ／菅野優香著

昭和歌謡と人文学の季節／井口眞著

〔日常〕のなかの近世―ある小さきものの物語／西岡直樹著

イスラーム世界と平和／中西久枝著

Z世代のアメリカ／三牧聖子著

イギリス湖水地方におけるアーツ・アンド・クラフツ運動／臼井雅美著

分断を乗り越えるためのイスラム入門／内藤正典著

若返りホルモン／米井嘉一著

ロベール・ルバージュとケベック／神崎舞著

バルカンの政治／月村太郎著

関西フオークとその時代声の対抗文化と現代詩／瀬崎圭二著

定本新島八重伝 倜儻不羈の女／吉海直人著

レクチャー

ラットランド・アピールをもう一度読んでみる ―同志社の原点を考える― 同志社社史資料センター

59

同志社クローズ・アップ

同志社創立150周年記念イベントのご紹介…………… 法人事務部 創立150周年記念事業事務局 66
ハリス理化学研究所研究発表会を開催…………… 大学ハリス理化学研究所 69
FROM NOW ON―地球を守るequality…………… 女子大学学芸学部メディア創造学科教授 高木 穂子 71

「食」について考える探究的な学び―School Meals Project―…………… 中学校・高等学校 英語科教師 反田 任 73
雪不足に負けるな！ 同志社香里中学・高校スキー部…………… 香里中学校・高等学校 体育科教師 スキー部顧問 竹田 幸平 76

海外語学研修の再開と新しいプログラムの導入について…………… 女子中学校・高等学校教師 林 昌美 79
総合的な探究の時間の可能性―同志社国際高等学校のとりくみ―…………… 国際中学校・高等学校教師 西田喜久夫 81

6年生修学旅行 鹿児島・熊本方面…………… 国際学院初等部教頭 風間 寛 82
台東大学附属小学校との交流…………… 小学校教師 振本ありさ 84
中庭「クスノキ」の伐採 ―お別れ礼拝と遊歩道の設置―…………… 幼稚園教師 遠藤 稚絵 86

同志社の一貫教育 hitohito-I!

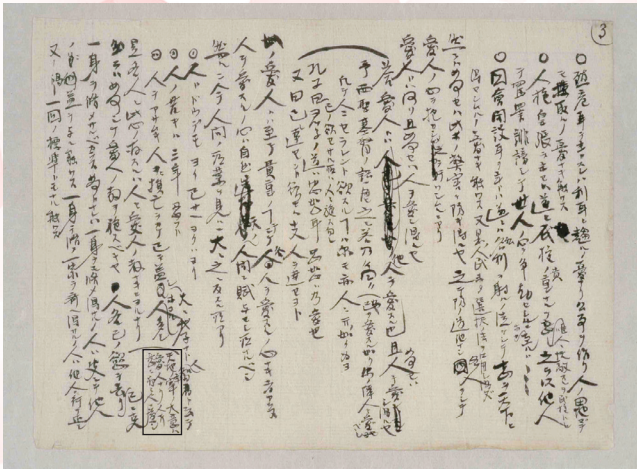
hitohito-I!

同志社一貫教育探求センター所長 大久保雅史

88

●本誌では学校法人同志社の各学校名から「同志社」を省略して、左記のとおり表記しています。
大学=同志社大学、女子大学=同志社女子大学、中学校・高等学校=同志社中学校・高等学校、香里中学校・高等学校=同志社香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校=同志社女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校=同志社国際中学校・高等学校、小学校=同志社小学校、国際学院初等部・国際学院国際部=同志社国際学院初等部・同志社国際学院国際部、幼稚園=同志社幼稚園
●執筆者等の役職・職位は2024年3月31日現在、大学広報課が把握している範囲で表示しています。

新島 襄の言葉



天地の主宰の大意は愛人なり。人その意を敬しみ愛すべし。
(同志社編『新島襄教育宗教論集』岩波文庫、295頁)

女子大学学芸学部特任教授

なかむら のぶひろ
中村 信博

自由民権運動と国会開設運動の機運高まるなかで、新島は演説草稿「愛人論」によって、愛国至上主義に対する疑義を明確にした。「愛国」は「書生の空論」であり、「風雲に登る階梯」（立身出世の手段）であると退け、「外国人を敵視する憂いなき能わず」と警戒した。

上揚文は、世界秩序の根源である神を理解することは、「愛人」、すなわち「隣人愛」と等値であるとしたうえで、その愛に徹するようにと訴える。「人をあざむき人に損亡をかけ、己れを益し、大いに我が子など人智者と云いてほこる人多し」と嘆いたあとに、その利己主義の由来を「人に愛人の教えなきによるなり」と説明した直後に書き込まれている。草稿の片隅に後から挿入されたように見える。新島にとって「愛（敬）神」と「愛人」の平衡は、忘却されてはならないものであった。

「神を愛し、隣人を自分のように愛せよ」（マルコ12章33節）と教えられたイエスの神を「天地の主宰」と敷衍し、創造主へと注意を喚起した。「愛人」は、「天地万物を愛する」ことにも等しい。近代科学を必須の課題とした新島は、しかし神と科学を都合よく区別する風潮を懐疑した。そこにはすでに環境問題への視座が胚胎している。「人の目鼻口付きを愛する等は甚だ下等の愛」（後半部）も今日のルッキズム（外見至上主義）批判を思わせる。

本質を探究しつづけた新島の言葉はいつの時代にも新しい。

創立150周年記念イベント「全同志社人がつなぐ150km」

11/4(土)、快晴のもと、約250人の同志社人が同志社大学京田辺キャンパス陸上競技場に集まりました。

「かけっこ教室」では100人を超える子どもたちが、同志社大学スポーツ健康科学部の新井彩准教授とボランティアで協力をいただいた同志社大学体育会陸上競技部の学生によるレッスンを受けました。それぞれの体力に合わせて、身体を動かしたり、短い距離を走りました。続いて行われた4×100mリレーでは、在校生チームや家族チーム、卒業生チームなど9チームが熱戦を繰り広げました。午後は、100人が1,500mを走り150kmを目指す「150kmセブレRUN」を実施し、親子や友達同士が一緒に楽しみながら走る姿が見られました。当日の様子は同志社創立150周年記念HPでご覧いただけます。

<https://150th.doshisha.ed.jp/>



ACUCAのPresident引継ぎ式を執り行いました

2023年11月17日、本学が加盟しているアジアのキリスト教主義大学の協会であるACUCA (Association of Christian Universities and Colleges in Asia)の22-23年のPresidentである韓国の韓南大学のKwang-Sup Lee学長、事務総長のKitai Kim先生および国際交流部門の皆様が本学にお越しになり、ACUCAのPresident引継ぎ式を執り行いました。

ACUCAは、アジアのキリスト教主義大学がキリスト教主義教育の質の向上と相互理解を目的に1976年に結成した協会で、現在は、アジアの8か国・地域の64大学が加盟しています。本学は、2024年1月から2025年12月までの2年間、ACUCAのPresidentを務めることになっています。





『医薬基盤・健康・栄養研究所(NIBIOHN)と連携・協力の推進に関する協定を締結』

2023年12月18日

医薬基盤・健康・栄養研究所(NIBIOHN)と本学は、両者の特性・強み及び資源を活かし教育・研究・医療に関して連携協力するため、協定を締結しました。この協定によって、学術研究を促進させ、健康、栄養及び医療分野における専門知識を有した社会貢献できる人物の育成を行うことで、関係分野の専門人材の充実、学術及び科学技術の発展・継承に寄与することを目的としています。研究資源や設備を共有し、教員や学生がよりよい環境で学び、研究を深めていけるよう、積極的な活動を目指しています。



『岩倉祭』

高校は、9月28日(木)に体育祭、9月30日(土)から10月2日(月)の3日間で岩倉祭を行いました。コロナ感染対策による制限のない岩倉祭は4年ぶりです。生徒たちの熱い思いが込められた「会心の一撃」というテーマのもと、熱心に取り組み、大いに楽しみました。



[体育祭]



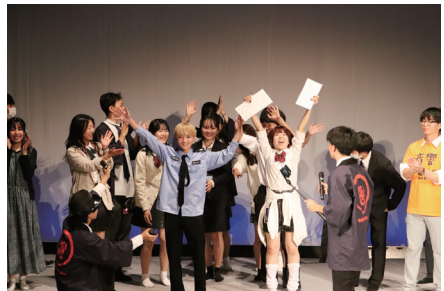
[1年生行事]



[2年生行事]



[演劇祭(3年生)]



[フィナーレ] 結果発表

聖歌隊と有志生徒によるオーケストラ演奏

2月19日(月)におこなわれました中学礼拝において、本校聖歌隊と中高有志生徒によるオーケストラでモーツァルト作曲「アヴェ・ヴェルム・コルプス K.618」を演奏しました。有志オーケストラは4月より放課後毎週1回練習を行い、今回は初の舞台となりました。



「クリスマス ページェント」

12月16日(土)クリスマス ページェントを行いました。朝の部は生徒全員で、夜の部は白川学園の方々・在校生保護者・コロナ禍において全員でのページェントを経験できなかった卒業して3年目までの卒業生(希望者)を招いて、心を合わせて4年ぶりの礼拝を守る事ができました。



中学・高校 体育祭

2023年10月4日

本校開校以来はじめての中高合同での体育祭を開催しました。各クラスを色分けして、16競技の種目を競いました。



2023ハロウィン

2023年11月1日

11月1日生徒会主催の「ハロウィン」を開催しました。思い思いの衣装を身に纏って、ルールを守っての楽しいイベントになりました。



点灯式

2023年11月17日

クリスマスイルミネーション点灯式を行いました。今年から山手幹線道路からよく見える正門玄関に設置をしました。





初等部:『スポーツデイ』

2023年10月20日

10月20日(土)に国際学院初等部のスポーツデイが開催されました。コロナのため一昨年度は学年単位で、昨年度は低学年・高学年に分かれての分割開催でしたが、今年度は4年ぶりの全学年開催となりました。子どもたちは徒競走、リレー、団体競技など、1つ1つの種目を一生懸命取り組みました。結果はDIA始まって以来の赤組・青組両者引き分けとなりました。



国際部:Chubu University collaboration

2023/10/17

In October, DISK grade 10 students and their science teacher had the opportunity to collaborate with peers from another international school and researchers from the Neural Cybernetics Laboratory at Chubu University in Aichi Prefecture. Together, we witnessed the daily life of a researcher and explored adaptive motor control in biological systems by carrying out a prism adaptation experiment. This collaboration greatly benefited the students as it allowed them to reinforce their understanding of the scientific method and fostered their collaboration skills.





同志社小学校

Doshisha Elementary School

点灯式礼拝

同志社小学校では、11月24日(金)に点灯式礼拝を行いました。新型コロナウイルス感染症の影響により、全児童、教職員が集合しての礼拝開催は4年ぶりとなりました。讚美歌斉唱、聖書朗読、説教に続き、横井校長と係の児童によりクリスマスツリーが点灯されました。校舎中央のチャペルコートに輝くツリーは12月25日までクリスマスの喜びを伝えました。



秋の遠足～京都市動物園～

2023年10月26日

秋晴れの下、全園児で京都市動物園へ遠足に行きました。年少組にとっては初めてのバス遠足。お兄さん、お姉さんに手を引いてもらって動物園を楽しむことができました。

背の高いキリンが挨拶するかのように親子で近くまでやってきたのに歓声をあげたり、ゾウが水の中に潜るようにしながらじゃれ合う姿を見て大喜びでした。お家からも遊びに行くことが多い動物園ですが、お友達と一緒に来たことが何よりもうれしい様子で、笑顔いっぱいの1日でした。



収穫感謝祭

2023年11月15日

子どもたちが各家庭から野菜と果物を持ち寄り、収穫感謝祭を行いました。一人ひとりがホールに捧げると、部屋いっぱいに野菜や果物の香りが広がり、子ども達から歓声があがりました。

たくさんの野菜や果物を前に、園長先生のお話を聞き、神様が与えて下さった豊かな恵みや、土を耕し種をまいて野菜や果物を作ってくださいる農家の方々、お店の方、お家の方などに思いを馳せ、みんなでお祈りを捧げました。私たちの生活を守り支えてくださる様々な存在に感謝の気持ちを持つとともに、分かち合うことについて考える貴重なひとときとなりました。



インタビューの2人

老舗食品メーカー社長

おおはし ゆう き
大橋 祐貴さん

東京から新潟にUターン就職し、30歳で老舗食品会社の社長になりました。東京時代は上昇志向が強く、恵比寿に住み、六本木で働きました。でも自分には合わない生き方でした。今は等身大のまま生きることで満たされ、安定することで得られたものを、周囲に少しでもお渡しできたらハッピーだなと思います。

1987年新潟県生まれ。2009年、同志社大学法学部卒業と同時に東京の都市銀行に就職。以降、ファストファッションブランド、ウェブ系ベンチャー、ファイナンシャルプランニングなどの企業に勤務。2016年、新潟市に本部を置くNSGグループに入社。新潟市で伝統的な漬け魚を手がける株式会社小川屋に、再建担当ゼネラルマネージャーとして出向。2017年、同社の代表取締役社長に就任。



Interview

インタビューの2人

私の志

ヨグネット代表理事

むか い ち か
向井 智香 さん



ヨーグルトが大好き。ご当地ヨーグルトの魅力の認知拡大と、生産者さん同士の交流・課題解決を目指して「ヨグネット」という団体を立ち上げました。「ヨーグルト活動家」として、生産者さんと一緒にヨーグルトの未来を創っていきます。



1985年大阪府生まれ。2008年、同志社女子大学学芸学部情報メディア学科（現・メディア創造学科）卒業。2010年、同大学大学院文学研究科修了。以降は母校のメディアサポートセンター、ウェブ制作会社等で仕事をしながら現代アートの制作に取り組む。その間、SNSでヨーグルト関連の発信を続け、2018年、「全国ヨーグルトサミット」での講演会で講師を務めたことを契機にご当地ヨーグルトの活動を推進。2023年6月、一般社団法人ヨグネットを設立。著書に『ヨーグルトの本』。

Interview

私の志

老舗再生に取り組みUターン社長

「正しい商売」を理想に掲げ 故郷・新潟への社会貢献を志す

道を探し続けた20代を経て、故郷・新潟にUターン。未経験の食品業界に飛び込み、30歳で老舗の再建を託されました。支えになったのは多分野に取り組んだ経験と、正しい商売をしたいというまっすぐな価値観、そして故郷への思い。本来のご自身に立ち還り、誠実に周囲の信頼を得ていった足跡をたどりました。

自分の道を探し続けた東京を離れ
家族と故郷のために新潟へ

——卒業後は東京でしばらく勤務されました。Uターンの経緯を教えてください。

大橋 最初は銀行に就職し、その後、数回転職する中で、金融だけでなくマーケティングなどさまざまな分野を学びました。前向きに言えば、自分の興味や期待感に従ってキャリアを選び、チャレンジを続けた結果です。でも言い方を替えれば、やはり道を固めきれない部分がありました。

おおはし ゆうき
大橋 祐貴さん
(老舗食品又一社社長)



もっと成長できるのでは、もっと自分に適した環境があるのではという漠然とした考えのもとに、行動を繰り返していったのだと思います。その最中、地元（新潟県柏崎市）で飲食店を営む父が体調を崩し、同時期に祖母が亡くなりました。家族や故郷に対して自分はどう生きるのか、自分にとって何が本当に大事なのかを、そのとき初めて真剣に考えたように思います。新潟に戻って数カ月間実家を手伝い、また東京に行って仕事をしながら一年ほど考え続け、最終的に新潟に戻る道を選択しました。

——当時の悩みを、もう少し伺ってもいいですか。

大橋 自分を他人と比較する時期もありました。同志社の友人たちの多くは企業人や弁護士として活躍していた一方、私は転職しながら空回りする部分もあって、明確なベクトルを定められずにいました。10年間自分の道を決めきれず、でも変わらない自分に気づいていたので、ここでけじめをつけないと30代もこのままなのだろうなと思ったんです。新潟に戻る決意を固めたときは、家族や故郷を大切にしたいという自分の価値基準が明確になったので、それ以外の部分はバツサリと断ち切れました。すっきりしました。

——新潟での就職活動はどのような点を重視されたのですか。
大橋 ワークライフバランスです。その上で、面接時に老

舗再生の話聞いて関心を持ちました。東京で視座の高い仕事をしたいと思っていたのは、経営に向かっていく発想だったのではと考え、その気持ちに素直になろうとしました。企業再生という仕事を通じて地元へ貢献できることも大きな意義を感じました。

——小川屋さんの再建についてお聞かせください。

大橋 私がゼネラルマネージャーとして来た当初は、倒産してもおかしくない状況でした。小川屋は明治26（1893）年創業で、新潟特有の「漬け魚」を作ってきた老舗です。創業当時の新潟は鮭・鱒の遠洋漁業基地として栄え、毎年一千万匹の鮭が水揚げされていたと聞きます。醸造業も発達していたので、生魚を味噌や酒粕に漬けた漬け魚という食べ方がありました。これをパックにした主力商品が売れなくなっていたのです。食生活も当時とは変化しましたし、パッケージや売り方などに、どうしても古い印象を持ちました。伝統に固執し、時



17世紀に築かれた町並みが残る古町にたたずむ店舗

代の変化を読み解くことができなかつたわけですね。もともと贈答用がメインだったので、若い方に手に取って試していただく機会も減った。どうすればその「1回目」を生み出せるかを考えました。

——何が大きな転機になりましたか。

大橋 思い切って、メインの商品を変更しました。漬け魚は生魚の味噌漬けなので、ご自宅で焼いていただく手間がかかります。でも新しい客層を開拓するとなったとき、そもそも若い人は魚を焼かないよという話が出た。そこで私が社長に就任した年、生の漬け魚を看板商品から外し、サブで取り扱っていた新潟の郷土料理、^{やきつけ}焼漬をメインにしま



開封すればすぐ食べられる焼漬を主力商品に推したことが老舗再生を後押しした

した。焼き魚を醤油ベースのタレに漬けた、これも保存食の一つです。既に焼いてある魚を真空パックにしてあるので、開封すればすぐに食べられます。浸透までは時間がかかりましたが、その後は売上も伸び、生魚という分野ではなく郷土料理やお土産という分野で扱ってくださるようになり、

チャンネルも広がっていききました。一方で、変わらないものも大切です。小川屋は現在で創業130年を超えたところですが、創業200年まで継続できるような基盤の再構築にも取り組んでいます。この先時代が変わっても変わらない価値基準を固め、それに基づいて経営判断をしていくような組織作りです。それはどんな状況でも丁寧なものづくりをして、お客さんのためになるものは絶対省かないという姿勢でもあります。これがぶれないことが大切だと考えています。

人間関係を大切にして嘘のない商いを

——30歳の若い社長が誕生したとき、社内の反応はどうだったのでしょうか。

大橋 ベテランの社員さんに至るまで皆さん良い方ばかりでしたが、やはり私に対して懐疑的な見方もあったと思います。そこはコミュニケーションを大切にして、経営方針を繰り返し説明しました。丁寧な仕事や接客など、社員さんが共感してきた当社の経営理念や伝統的なやり方を今後も核とするのであれば、そのために変えるべき部分を変えましょうと。何とか黒字化できて結果が一つずつ出てきたので、そこに対しては信頼していただけだと思います。今は社員さんと近い存在になれたというか、社長として扱

われていません（笑）。

——社長就任から6年経ちました。どこに最もやり甲斐をお感じになりますか。

大橋 経営のやり方は十人十色です。私は理想主義かもしれませんが、嘘をつかず、本当に正しい商売がしたいタイプです。そういう姿勢を崩さずに会社を運営していけることと、お客様からそれに対してお褒めの言葉をいただくことがやり甲斐ですし、進み続ける原動力になっています。

——学生時代のお話をお聞かせください。

大橋 私は新潟県の柏崎市で18年間育ったので、そこで培った価値観がすべてでした。そこから同志社に来ると、関西一円や全国から学生が集まっているし、系列校からの人もいる。国際色も豊かだし、自由な校風も印象的でした。いきなり価値観の渦に巻き込まれた感じでした。その中で生活したおかげで、価値観とはそもそも多様なものだから、多様性を受け入れた上で自分を作っていくんだと気づけました。20代は多様すぎる価値観や他人との比較で苛まれた部分もありましたが、大学での気づきがあったからこそ、今の自分に至れたのだと思います。

——大橋さんの志とは、何ですか。

大橋 自分自身と向き合い、自分を感じ、根本的な価値観に素直になって生きることでしようか。20代の頃も素直だと思ってはいたのですが、それは他人との比較や他からの影響を受けたものに素直だったのであり、結局は流されていた部分も多かった。大切なのは自分の価値観に沿って行動したり言葉を発したりすること。そうすれば自分が変わり、周囲が変わり、世界が変わる。それが最終的に、新潟のためになればいいと思います。

——読者にメッセージをお願いします。

大橋 若い方は、かつての私のように道に悩むこともあると思います。悩んだらぜひ、自分と対話する機会を設けていただきたいです。そして他人の評価を通さず、自分が本当に好きなことをきちんと洗い出していく。それが私の経験からお伝えできる言葉です。

（2024年1月18日、新潟市内にて）





むかい
向井 智香 さん
（ヨグネット代表理事）

私の志

ヨーグルト業界を応援する活動家

生産者・メーカーと共に

ご当地ヨーグルトの未来を創造する

全国各地で作られる味わい深いヨーグルトの魅力を発信しながら、牧場や乳業メーカーとの交流によって、ご当地ヨーグルトの課題解決に取り組む卒業生がいます。ほとぼしるヨーグルト愛と、同志社で培った知性と教養、そして行動力を感じるインタビュになりました。

ご当地ヨーグルトの魅力を発信する「ヨグネット」

——ヨーグルトとの関わりを深化をお聞かせください。

向井 もともとヨーグルトが好きだったところに濃厚なギリシャヨーグルトと出会い、美味しさに感動しました。そこからヨーグルトの種類やカテゴリーに関心が向き始め、食べたヨーグルトの記録をネットに残し始めたのが、今に繋がるスタートです。2011年に発信を始め、18年にはブログサービスの公式アカウントやWebメディアから取材をしていただきました。それが契機となり、同年に開催

された全国ヨーグルトサミットに講師として呼んでいただきました。

——全国のご当地ヨーグルトが集まるイベントですね。

向井 初開催でも約4万人が集まり、ヨーグルトの可能性を改めて感じましたし、多くの中小乳業メーカーや生産者、研究者の方々に出会えて交流が生まれました。このサミットは第3回まで開催されましたが、毎回運営母体が異なっており、ノウハウが継承されず、引き継ぎ先も見つかりません。そこで第三者的な立場で生産者さんたちを繋ぐハブ的な役割を担っていた私が、中心となる団体を作ってサミットを継続させようと仲間と取り組んだのが「ヨグネット」の始まりです。

——ヨーグルトサミットの継続にそこまで注力された理由は何でしょうか。

向井 作り手ももっとスムーズに情報交換できれば、ご当地ヨーグルトの認知も拡大されるし、より正しい情報を発信していけるのではと考えたからです。近年はヨーグルトのイメージが菌や機能性に偏りすぎて、生産者が原料のミルクにこだわっているというメッセージが伝わりにくくなりました。一方、ご当地ヨーグルトの新鮮な生乳100%という強みを伝えるには「量産品の多くはバターを作る際にできる脱脂粉乳などを原料にしている」という前提を知

ってもらった必要がありますが、これも伝え方を間違えると量産品の否定につながりかねません。量産品にはバター作りの「副産物消費」という側面があり、SDGsでもあるんですね。両方あって良いのであり、何が違うのかという正しい情報を伝えることが大事です。そして酪農家の思いやアイデンティティがちゃんと消費者に伝わることで、一次産業者のモチベーションに還元されることも重要だと思っています。

——ヨグネットの活動内容を教えてください。

向井 直近では昨年12月15日に羽田空港にオープンした羽田産直館で、ご当地ヨーグルトの卸販売を始めました。普段はご当地ヨーグルトの認知拡大のため、さまざまな発信をしたり、イベントに出たりしています。酪農の理解醸成を目的として、オンライン牧場見学のコテンツも準備中です。ハンドメイドアクセサリー作家である私の母に作ってもらったアクセサリーなど、牛のグッズも販売しています。



羽田産直館で販売している全国各地のヨーグルト



イベントなどで販売されるアクセサリや文具などの「牛グッズ」

業界内部の課題改善にも取り組みたい

—改めてヨーグルトの魅力をお聞かせください。

向井 思ったよりも無限の分岐があるところです。プレーンヨーグルトを食べ比べても、牛の育った環境、飼料、搾乳する季節、使用

する乳酸菌や発酵時間などの違いで、いくつも分岐があるところが大きな魅力です。

—業界内部で感じておられる課題はありますか。

向井 規格の曖昧さでしょうか。例えばチーズにはナチュラルチーズ、プロセスチーズなど、法で定められた成分規格があります。でもヨーグルトは法律上、「発酵乳」という言葉でくくられています。成分規格はあるにせよ、ヨーグルトという言葉自体に法律がついてきていないので、乳成分が規格に満たなくても「〇〇&ヨーグルト」のような名前を付けることができます。これは消費者の商品選択を難しくして、ヨーグルトの多様性やご当地ヨーグルトの良さがうまく伝わらない一因になっています。メーカー

の使う言葉と消費者の理解の間にも乖離がある。そこをもっと翻訳し、整理して、正確な情報源を私たちが提供することで、消費者の商品選択が変わってきたり、今まで腸活のためにヨーグルトを食べていた人がミルクの魅力を楽しめるようになったりすると思います。

—現在の大きな目標は何ですか。

向井 早急に取り組みたいのは酪農情勢の改善です。酪農家の減少が進む現状を広く伝え、一次産業者への援助などについて、みんなのパワーで改善していきたいです。もう1点はご当地ヨーグルト自体の課題解決です。メーカーは乳業のプロではあっても、発酵のプロは非常に少ないんですね。外部の商社にレシピを依存している現状では、多様な地域の乳業メーカーが同じ製法を採っていることもある。そのあたりを突き詰めていくクラフトマンシップが各地で高まれば、美味しさにさらに多様性が出るのでは。羽田産直館での販売データを分析してメーカーにお伝えするなど、ヨグネットにできることはあると思います。

大学で身につけたリベラルアーツと行動力

—大学での学びをお聞かせいただけますか。

向井 私は現代アートの作家を目指していたので、授業以

外はビデオインスタレーションの制作に没頭していました。テーマの一つは「痛み」。高校時代、キリストの受難に関心を持ったことに端を発したテーマです。その中で広島の原因ドーム、アウシュヴィッツの強制収容所跡、ベルリンの壁を見に行くなど、フィールドワークに力を入れました。現地で感じるものと本で読むものの両方を大切にしながら学び、これを人に伝えるために適切な表現を考え、展覧会なら場所を手配し、告知を行い、会を開催してアーカイブに残して次に繋げる。それを全部、一人でしていました。

——まさにヨグネットの活動そのままですね。

向井 牧場や工場を見学し、理解した事を解釈してイベント開催に繋げる。大学での学びと全然ジャンルは違いますが、している事は同じですね。

——同志社女子大学での学びが、大きく今に繋がっていると思われませんか。

向井 そうですね。情報メディア学科（現・メディア創造学科）ではパソコンでデザインを学んだので、催事の装飾物や配布資料、SNSに上げる動画や写真は全部自分で作成しています。それに今思うと、やはり同志社で学んだリベラルアーツがすごく生きています。だから今、アンテナを張れる幅が非常に広いのだと思います。女子大学という



自信になったと感じています。

——改めて、向井さんの志をお聞かせください。

向井 メーカーとの繋がりを大切にしながら、皆で一丸となってヨーグルトの未来を創ることで。ご当地ヨーグルトの価値を高め、それが波及して一次産業の価値を高めるよう、大きな波紋を皆で創っていきたいです。

——読者にメッセージをお願いします。

向井 今は腸活という側面が目立ちますが、ヨーグルトには一次産業の方たちの思いやクラフトマンシップがすごく詰まっています。原料乳の背景やヨーグルトの歴史にも目を向けると非常に面白いので、ぜひそういう面も見たいだけだと嬉しいです。（2024年1月12日、東京にて）

環境も大きかったです。女性ばかりの中心にいれば性別的な役割を気にする必要がないので、自分らしく動けました。その経験も、ヨグネットの代表になるための

かつて新島襄が「大学は智識の養成場なり、宇宙原理の講究所なり」（「私立大学設立の旨意、京都府民に告ぐ」1888年）と語ったように、同志社にとって「宇宙」はひとつのキーワードと言える。

2024年1月20日に渡辺公貴教授（大学生命医科学部）が開発に携わった「SORA-Q」が月面着陸・撮影に成功したことは大きなニュースとなったが、本座談会では小原克博教授（大学長、神学部）がモデレーターを務め、渡辺教授の他、宇宙航空研究開発機構スタッフである足立寛和氏（大学大学院工学研究科 2010年修了）を招き、「SORA-Q」をはじめとした最新の宇宙開発事情や同志社での宇宙研究や教育活動に至るまで、それぞれの視点から今後の展望を語り合った。



同志社大学 学長・神学部 教授
小原 克博

同志社大学 生命医科学部 教授
渡辺 公貴

宇宙航空研究開発機構 研究開発部門
主任研究開発員
足立 寛和 氏

同志社大学教授の開発した変形型ロボットが
日本初の月面探査ロボットに



小原 克博

同志社大学 学長・神学部 教授

小原 ● 「宇宙」という言葉は明治初期にちよつとしたキーワードになっており、新島襄もこの言葉を比較的頻繁に使っていました。その中で二つを紹介します。一つは1889年に彼が記した「大学設立主旨」の一節、「宇宙の天理を講究し」という言葉です。晩年の新島は大学の理想像を「深山大沢しんざんだいざく」としました。これは中国古典に由来する言葉で、龍蛇のような傑出した人物を輩出する大学を新島は作ろう

としていたわけです。そういう大きな文脈の中で、彼は宇宙にも言及しています。それが1888年に発表した「私立大学設立の旨意、京都府民に告ぐ」の中の、「大学は智識の養成

場なり、宇宙原理の講究所なり」です。新島は大学をそのように定義しました。彼は留学中、特にアーモスト大学で最先端の地質学や天文学を勉強しています。そこから日本でも、宇宙や地球を理解するための自然科学を発展させたという願いを持つていたことが分かります。現代の学校法人同志社にいる我々は、これをどう受け止めればいいのか。これが本日の座談会の、一番のテーマです。私はキリスト教神学と、広く宗教研究を専門としています。宗教は今でこそ心の問題と考えられがちですが、長い人類史を振り返ると、まさに夜空を仰ぎ見ながら、人間と宇宙にはどんな関係があるのだろうと考えてきた分野でもあります。私自身、子どもの頃にはアポロ計画があり、大阪万博の目玉の一つとして月の石があり、いよいよ宇宙の時代が来たと心をかき立てられたものでした。日本のアニメの黎明期を支えたのも宇宙ものやロボットものでした。私はいわゆるファーストガンダム世代ですが、スペースコロニーが当たり前のような宇宙時代の物語には好奇心を大いにかき立てられました。そして研究を通じて、宇宙への関心も深めてきました。自らの思い出も振り返りながら、本日は宇宙への関わりを新たにしたいと思います。ではお二人にも自

己紹介をお願いし、現在の取り組みをお話しいただきましたよう。

渡辺 ● 私は2020年4月、同志社大学生命医科学部に着任しました。大学卒業後は時計メーカー、海外有名玩具メーカーの日本人を経てトミー（現・タカラトミー）に入り、約20年を過ごしました。2015年から宇宙航空研究開発機構（以下、JAXA）の公募型研究で宇宙ロボットの開発にも携わってきました。2006年から18年までは同志社大学プロジェクト科目の講師を務め、学生に何かを伝えたいという思いが強くなって同志社大学に転職した次第です。そこからは一貫して超小型の変形月面ロボットであるSORA-Q^{ソラクィ}などの開発をしています。SORA-Qは今年1月20日、小型月着陸実証機（SLIM^{スリム}）から着陸直前に放出され、月面に着陸して撮影に成功した、世界初の完全自律月面探査ロボットになりました。直近では国のムーンショットプロジェクトにおいて、2050年に月面で活躍するロボット群の開発を、学生と共に進めています。5台、10台と繋がって大きな構造体を押したり高所に登ったりと、さまざまに活躍できるロボット群です。

足立 ● もともと宇宙関連の研究をしたいという希望をお



世界最小・最軽量の月面探査ロボット「SORA-Q」

ット型ロボット」として登録されてシリーズ化することになり、次は「SOBOT」という世界最小の二足歩行ロボットを開発、2007年に発売しました。これが2008年に「今年のロボット」で経済産業大臣賞をいただき、2、3年後にJAXA宇宙科学研究所の先生から共同研究のお誘いをいただきました。当時はお話だけで終わりましたが、会社でさらにロボット開発を進めたものの、やはり行き詰まるんですね。そこで社内だけでなく、他の技術を持つところと一緒に何かできないかと検討した一つがJAXAで

持ちだったのですか。
渡辺 ● それは全然なかったです。2002年、タカラトミーが全世界一斉に発売して大ヒットしたペットロボットを、私のチームが商品開発したことが始まりでした。ギネスブックに「世界最小のペ



SORA-Qが撮影した月面画像

した。そのときにJAXAの昆虫型ロボットの共同開発パートナーの公募を見つけ、今までの実績が認められて共同研究をすることになりました。

小原 ● そのときは、まだSORA-Qの形ではなかったのですか。

渡辺 ● 当初は昆虫型というコンセプトがあっただけです。最終公募から研究テーマに落とし込まれたときには、小型ロボットという形になっていました。SORA-Qはウミガメを模したもので、生物型ですね。生命医科学部で

なぜ宇宙なのかとよく聞かれますが、私の入った研究室は、偶然にも以前から生物模倣を扱っていたんです。

小原 ● JAXAが渡辺先生に求めたのは、月面、特に傾斜地でも動けるような小型ロボットの開発

だったのですか。

渡辺 ● 広域探査、つまり月と限らず火星など人類未到の地で動くロボットです。実は昨年4月、民間月面探査プログラムで着陸機がSORA-Qを搭載して月面にアプローチしたのですが、着陸機が月面上空で失速し、ミッションを果たせませんでした。それだけに今回の撮影成功は本当に嬉しかったです。ただ、これだけで終わりたいはありません。学生に志を持って何かに取り組んでほしいというのが大学着任時の私の思いでした。日々をただ楽しく過ごすよりも、将来が楽しくなるための学びにこそ真の楽しさがあることを、学生には伝えたい。特に今回はSORA-Qの撮った月面写真が、「同志社大学」というクレジット入りで全国紙の一面に掲載されました。これを機に、SORA-QをさらにJAXAで使っていただくため、改良方法の研究を進めています。もっと月で活躍できるロボットの研究も進めたいですね。ただ私の研究生活にも限りがありますので、これは何らかの形で同志社大学で継続していきよう、学生と共に私も育っていきたいと思います。

JAXAで再使用ロケットを研究

小原 ● 足立さんからも現在の取り組みをお願いします。

足立 ● 私もアニメなどに影響を受けて宇宙やロボットに興味を持ちましたが、同志社大学では次に好きだった車をメインとして大学院まで研究しました。JAXAでは最初の3年間、ロケットの開発や打上げなどの運用を行う宇宙輸送部門に所属し、種子島でHIA、HII Bの2号機など計8機ほどの打ち上げに携わりました。宇宙とは全然違う自動車業界から入りましたので、車の常識が宇宙ではイレギユラーであるなど、カルチャーショックを受けながら学ばせていただきました。現在は研究開発部門に所属し、1段再使用飛行実験(CALLISTO)プロジェクトに、構造や熱防護をメインとして参画しています。従来は使い捨てだったロケットの再使用化を目指す研究です。ロケットを宇宙へ送る際、安全性はもちろん重要ですが、一番大きなハードルはコストです。この改善方法の一つとしても再使用は有効なので、各国が研究中です。アメリカでは宇宙関連企業のスペースX社が世界に先駆けて成功しており、現在

では2段式ロケットのうちの半分の1段を再使用しています。今後は人が地球外に出ていくのが当たり前になる時代が来ると思いますので、日本としても当然そういう技術開発は必須であると考えています。そのための研究開発(CALLISTOプロジェクト)を日本、フランス、ドイツの3カ国共同で実施しています。

小原 ● 具体的な飛行計画はあるのですか。

足立 ● あくまでも実験用なので、我々が宇宙と呼んでいる高度100 km以上には到達しない機体です。では何のためにやるのかというと、100 kmより上に物を送る技術は、H・II Aをはじめとして日本も持っています。それが戻ってくることにしても、はやぶさなどを通じて技術は持っています。それらをもう1回使うための技術を日本で確立するためです。再使用においては、従来では想定していなかった課題も既にあぶり出されており、今はそれらを一つつ研究開発しながら潰しているところです。

小原 ● 足立さんが研究しておられる熱防護について教えてくださいいただけますか。

足立 ● 地表近くの低い軌道を人工衛星が回る速さ、つまり第1宇宙速度は約8 km/秒。そういう速度のものが大気

とぶつかると、断熱圧縮が起こり、非常に高温になります。流れ星のイメージです。その状態で、人が乗っても快適に降りてこられるように熱をマネジメントするシステムが熱防護です。その関係もあり、MMXのサンプルリターンカプセルなどにも携わらせていただいています。MMXとは日本を中心として、ヨーロッパとアメリカを含めて各国機関が協力して行なっている火星衛星探査計画です。火星にあるフォボスという衛星に着陸して土壌採取、軌道から火星観測なども行うミッションです。

渡辺 ● サンプルリターンのカプセルはすごい技術ですよ。

JAXAの相模原展示場では、はやぶさのカプセルだけは撮影禁止です。ノウハウの塊だからというのが理由でした。その大変な技術の内容を、可能な範囲でお聞きしたいです。

足立 ● 一般的カプセルの話にはなりますが、断熱圧縮が起こると、最も熱くなる領域だと1万℃以上などになります。そこから熱を受けて、カプセルの表面は数千℃という温度帯になります。一方で内部は、人が乗ることを考えるなら20℃台が求められます。炭素繊維などを使用し、たかだか数十mmの厚みで熱を遮断する技術なので、ノウハウの塊なのです。

SLIMとSORA・Qの成功が果たした役割

小原 ● ありがとうございます。私は人文系の研究者ですから、技術的には宇宙に何も貢献できません。ただ宇宙への関心をもう少し具体化して、宇宙をテーマに現代の課題解決ができればと考えています。このテーマに本格的に取り組み始めたのは、SDGs研究が発端でした。SDGsで地球上の問題を考えると、宇宙という視点を入れると見方が変わってくることに気づいたのです。JAXAもSDGsに関心を持っていると聞きます。宇宙研究で得られた成果や技術が地球上にも応用できるという、相互関係があるわけです。もう一つ、まさに今回のSLIMの目的の一つでもあります。月面の組成を調べることが結果的に地球の起源を調べることにもなることに、大変興味を持ちました。私は良心学研究センターのセンター長も務めており、同センターでは渡辺先生を含め、多様な自然系の先生方にも関わっていただいています。人文社会系や自然科学の英知を結集して、現代の課題に真摯に向き合いたいと思っています。我々は技術の進歩とともに目の前の画面はか

りを見るようになり、空を見上げなくなってきました。昔の人たちと比べて世界観が非常に貧困になっていると感じます。貧困になったコスモロジーをもっと豊かなものにして、コスモロジーの回復の中で人間のあり方も再発見していければ、宇宙への視線が我々の生き方にもフィードバックされるのではないかと気づき始めたんですね。ですから人文社会系の立場からでも宇宙にアプローチしていくことには非常に大きな有用性があると思います、この2年ほど、積極的に宇宙の最先端の研究を多くの方とシェアしながら、新しい学問領域を探求しています。さてSLIMが無事に着陸して、日本は月面着陸を成功させた世界で5番目の国になりました。そして直径80mmの球体であるSORA-Qが月面で活躍して今もそこにいることは、夢を与えてくれます。1月25日、JAXA、タカラトミー、ソニーグループ、同志社大学の4者が共同発表をした際、渡辺先生もコメントをくださいました。その中で渡辺先生がSORA-Qを「小さな一粒」と表現されたことが非常に印象的でした。聖書の「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(ヨハネによる福音書12章24節)を意識して書かれたことを、後で



渡辺 公貴

同志社大学 生命医科学部 教授

知りました。この「小さな一粒」は、今後の宇宙開発にどんな影響を与えていくでしょうか。

渡辺 ● この250gのロボットが月面で動けて着陸船などを撮影できることが

分かったので、今後は月と言わず、火星の衛星フォボスなどでも活用してもらえると期待しています。それにやはりSORA-Qは、宇宙機器としては圧倒的にコストが安い。まだまだ安くできる可能性もあります。一部には高い部品を使っていますが、中身はほぼ民生品、または大学生でも作れるような部品です。今までの宇宙機とは違うレベルで、手軽にロケットに積めるような将来が来るのではと期待します。またSORA-Qが注目されることについての玩具メーカーとしての目的は、お子さんたちに、科学技術への気づきを少しでも持つてもらうことです。ひいてはそういうお子さんが中学校、高校でも科学技術に興味を持ち、日

本中の大学で本格的に研究するようになってほしいですね。そういう思いを持ちながら、現在はムーンショットプロジェクトに取り組んでいます。

小原 ●ムーンショットプロジェクトでは、2050年には人類が新たな居住圏を開拓することを目指しています。アメリカは2025年以降に有人月面着陸を行うアルテミス計画を進めていますね。月に人間が降り立つのはアポロ計画以来です。ただ月に到着するまで、そして到着後も多くのリスクがあります。そこでロボットに先に行ってもらった方がいいのではと、私は思うのですが。

渡辺 ●政府資料では、2050年に100人ほど月に居住しているだろうと予測しています。アメリカなど他国の発表では、1000人から1万人ぐらいという数字がありました。ただ月へ行くコストをよほど下げないと、それは難しいと思います。月への輸送費を概算すると、1人あたり150億から200億円。100人となるとすごい金額です。その金額を、誰が何のために出すのか。過去50年を見ても、実はロケットはそれほど発達していません。安いと言われるスペースXは古いタイプのエンジンを使っており、画期的な推進方法に変わったわけではない。それを考

えると月へ人を連れていくには危険があるし、コストの問題にもどこかでおつかります。やはりロボット優先で作っていくのかなと思います。その割には、日本で宇宙関連のロボット開発を行っている会社は少ない。日本では唯一GITAIという会社が、月面で動くロボットを作っています。社長さんは同志社大学法学部出身で、NASAから非常に多額の資金を獲得するなど活躍されています。もちろん着陸船やロケットも重要ですが、その先に月面で活動するためにはロボット開発が重要です。重機などは日本の大手ゼネコンや建築機械メーカーが研究していますが、実用レベルには至っていません。今は官需だけしかない事業が、ビジネスになるのかという問題もあります。

宇宙関連教育を通じて文理融合思考を育て
広い視野で課題解決できる人材の育成を

小原 ●今回はSLIMだけでなく、SORAQの成功も世界中の人々に夢を与えました。渡辺先生のご経歴からも、一つの分野にとどまらず、好奇心を開発につなげていくことの重要性を感じました。そしてこの分野で世界を担

える人材が日本からも育ってほしいと思います。最後に、宇宙の研究開発と教育との関係、今後の可能性についてお聞かせください。

渡辺 ●小学生のお子さんはアニメに登場するようなすごい動きをするロボットを見ていますので、現実のロボットにはあまり興味を持ちません。その後6年生から中学生になると、徐々に実態に近いものに惹かれていきます。ところが今回のSORA・Qに関しては、大人はもちろん、お子さんたちの反応が非常に良かった。やはり宇宙への憧れは皆が持っているのです。一方で、日本では宇宙分野の人材が非常に不足しています。これを機に、日本の産業育成のためにも、小さな年齢から宇宙をキーワードとして、多様な科学技術に触れてもらう取り組みが増えてほしいです。

小原 ●「宇宙」は今後の教育にとって非常に大事なキーワードになると思います。JAXAはもちろん、民間の努力も大きく求められるところです。学校法人同志社でも有志の先生方を中心になって宇宙教育研究会を開催し、渡辺先生や宇宙関連の仕事をされている方々を講師としてお招きして、中高の生徒たちに話をしていただいています。各学齢で学べるもの、受け取れるものは多いので、小学生時

代から宇宙に触れるような教育ができれば面白いですね。未知なる世界に触れることの楽しさを駆り立ててくれるのが宇宙です。しかし日本の場合、高校ぐらいになると、進路が文系、理系に分かれがちです。そしていったん文系に進むと、理系の内容が全然分らない。その逆もありがちですが、それは日本の未来にもよくありません。現代は、人文社会系の知見と理系の知見とを総動員しないと問題解決できない時代です。専門知識を深めながらも複雑な諸課題を俯瞰できる力を養うため、単純に文理には分かれな共同のプラットフォームを教育プログラムに組み込むことが必要だと考えます。

足立 ●そういう意味でもSORA・Qは、非常に良いプラットフォームになれると思います。渡辺先生もおっしゃったように、学生でも作ってしまうのはすごく大きい。ロケットを学生だけで作るのは難しいですが、SORA・Qなら、例えば本物そっくりに実際の回路を作るところまで学生がやってみてもいいし、回路はパッキングして小学生でも作れるレベルのSORA・Qを準備することもできるでしょう。そういう機会に触れられれば、文系や中学生でも組み立てられるレベルのSORA・Qが可能だと思いま



足立 寛和氏

宇宙航空研究開発機構 研究開発部門
主任研究開発員

持つ意義は大きいです。そういう視点を育むためのプラットフォームがあるといいですね。JAXAも水と空気力で飛ばす水ロケットの指導などを行なっています。あれも一つのプラットフォームです。これらをうまく教育として取り込んでいただければと思います。そもそも私自身、車の研究室からJAXAに入りました。異なる分野や産業の壁は、案外ないと感じています。SORA・Qにしても、あのトランスフォームの技術はタカラトミーさんたちの技術が宇宙に通用する好例です。逆に、宇宙のために作った技術が一般業界にスピノフできる例もあるでしょう。最初から自分で線を引くのではなく、宇宙などさまざまなも

す。そこで一つの垣根は越えられるのでは。専門外であつても、自分の持つ知識が他の分野にもどこまで役立つのか、私ならこうするのにという発想力や視点を

のに触れる機会を教育で与えていただければと思います。
小原 ●「壁」は一つのキーワードですね。我々の社会生活にはいろいろな壁がありますが、それを越えることによつて初めて新しい事ができる。人との出会いや好奇心が壁を越えさせてくれ、未知なる領域へと進ませてくれる。まったく同じ事が新島襄にもあつたと思います。まさに鎖国という壁があつた時代に、彼はそれを越えて未知なる世界に向かつていった。そういう冒険心みたいなものを忘れてはいけません。今回のSORA・Qの成功は夢見ることの大切さや冒険的な挑戦の楽しさを、端的に伝えてくれました。このような楽しさを宇宙と絡めて同志社教育に取り込んでいければ、SORA・Qの播いた一粒の種は、とても大きな実りをもたらしてくれるのではと期待しています。本日はありがとうございました。

(2024年2月2日、今出川校地にて)

特別寄稿

Joe 誕生160年

同志社の源流・上海

元大学神学部教授

もと井 本井

やすひろ 康博

四十七年の分岐点

四十七年にわたる新島襄の生涯（永眠は四十六歳）は、内容的に三分割できる。

I（一八四三～六四）の二十一年間。II（一八六四～七四）の十年間。III（一八七五～九〇）の十六年間である。各期で名前や身分、生活圏がまったく異なる。

I期は、サムライの子として江戸で誕生してから函館からの密航までの期間で、名前は幼名の七五三太が敬幹という諱（成人名）に変わる。II期は、一年余の移動期間（船上生活）を含めて、主として欧米時代。身分は留学生で、この間サムライから信徒へと変身。名前も当初はJoe（ジョー）、アメリカ上陸後はJoseph（ジョゼフ）と改称。III期は、帰国から永眠までで、襄と名乗った。身分は牧師、宣教師で、同志社校長と同志社教会の牧師を兼務した。

分岐点はI期とII期を分ける一八六四年である。新島の生涯中、最大のスリリングな冒険の年であった。なかでも上海での出来事は彼の人生を前後半に分けるメルクマークとなった。

密航を助けた三人の船長

一八六四年、新島は三隻の船を乗り継いで密出国に及ぶ。品川から函館までは安中藩の兄弟藩、備中松山藩（現岡山県高梁市）所有の快風丸、ついで函館から上海までは長崎の貿易会社のベルリン号（船籍はプロイセン）、最後は上海からポストンに戻るハーディー商会のワイルド・ローヴァー号である。

快風丸の船長は不詳であるが、新島は加納格太郎と特定する（『新島襄全集』一〇、一六頁。以下、⑩一六）。同船が品川から高梁川河口の玉島港（現倉敷市）まで回送された際、新島は航海技術を買われて乗込んだ。

この時、懇意になったのが備中高梁藩士の加納である。その後、同船が品川から函館経由でサハリンへ行くことを新島に告げ、案に乗船を勧めたのも加納である（⑩三九～四〇）。加納はたとえ船長でなくとも航海上、重責を担っていたと思われる。編集委員会編『現代語で読む新島襄』（二九三頁、丸善、二〇〇〇年）に収録した略歴（本井稿）を転載する。

「加納格太郎（一八三四？～一九〇七）備中松山藩士。同藩で中小姓を務め、江戸詰めでは御供番句読師兼帯、銀

三枚二人扶持^{ふち}であった。快風丸で新島襄と玉島航海を共にした翌年、同船が箱館へ航海することを新島に教えた。

新島は帰国後、高梁に加納を訪ね、汁粉を振る舞われた。昔、箱館行きのおり、加納が送別のために新島を料理屋に誘ったところ、新島が「酒はいや。汁粉をくれ」と言ったことを加納は覚えており、「別れの時が汁粉なら、会う時も汁粉」となった。「後略」。

参考までにアメリカ人船長ふたりの略歴（本井稿）も同書（二八五頁、二八二頁）から転載する。

「**レイヴォォリー** W.T.Savory（一八二七〜一八九七）マサチューセッツ州セイラム出身の船長。ベルリン号で新島襄を箱館から上海まで運んだ。新島は船長の信仰を疑問視するが、セイヴォォリー自身はセイラムの第一教会（会衆派ユニテリアン）の会員である。晩年はセイラムで実業に従事したが、健康を損ねたためにフロリダに転出し、デランドで死去した」。

「**テイラー** H.S.Taylor（一八二九〜一八六九）ワイルド・ローヴァー号の船長で、新島襄を上海からボストンまで乗せた。新島（Joe）の名づけ親。帰米の折は留學生の新島をチャタム（マサチューセッツ州コッド岬）の生家に招き、家族同様にして成した。新島の留学中にボストン港で事故死した。それを知った新島は、彼の親戚に入信を勧める熱烈な手紙を書き送った」。

七五三太から Joe へ

三人の船長中、最も注目すべきはテイラーで、「私をまるで自分の兄弟のひとりのように扱ってくれた」と新島は感謝する（⑩四八）。年齢（十四歳上）や関りからも「アメリカの兄」であった。上海での初対面のおり、新島を日本名で呼べず Joe と呼び替えた（⑩四七）。なぜジョーか。

出身地のコッド岬ではよく知られた名前である。ただし「品のない愛称」とか。八重もまた「大変侮蔑の意味だった」と伝える（拙著『ピーコンヒルの小径』新島襄を語る（八）〜一一〇頁）。逆に聖書的な解釈説もある。ジョーは『旧約聖書』の「創世記」に登場するジョゼフ（ヨセフ）の愛称である。このヨセフの身上に新島を重ねて命名したのであれば、テイラーの予知能力は驚嘆すべきである。なぜか。

ヨセフは、兄弟によってエジプトに売られたが、さいわいにもパロ（古代エジプト王）の愛顧を受け、奴隷から宰相（首相）にまで昇りつめ、イスラエルの人々を大飢饉から救って感謝された。テイラーは、祖国を棄て異国に向かう日本人青年にどこかヨセフ的な生き方や心情を見抜いたの



①快風丸。（同志社エンタープライズ提供）



②ベルリン号 (同前)

であろうか。新島はアメリカではパロならぬA・ハーデーという土地の名望家の家庭に引き取られ、実子並みの処遇を受ける「大幸」(③四三二)に恵まれた。

ハーデーはワイルド・ローヴァー号の船主で、ボストンで貿易会社を経営する資産家であった。部下のテイラーが上海から連れて来た新島を見込んで、「アメリカの父」となった。「私のアメリカの両親は、私をJosephと呼ぶことにした」という(⑩四七)。ボストンではジョーの名は砕けすぎて上品ではないとの判断もあったようである。

こうして新島は以後九年間ジョゼフを名乗るが、帰国後のことを考慮してジョゼフ(ヨセフ)の漢語訳「約瑟」から新島約瑟と自署し始める。しかし、ジョゼフと読んでもらえないため、横浜に戻るやジョゼフをジョーに戻して漢字変換し、最初は「讓」、ついで「襄」とした。

八重もまた、帰国後の襄は「翰夫」と書いて「ジョセフ」と読んでいたが、「あまりむつかしいので『襄』とした」と証言する(永澤嘉巳男編『新島八重子回想録』一〇二頁、同志社大学出版部、一九七三年)。

生涯の運命を決めた上海

こうして見ると、襄の誕生は遡れば一八六四年の上海である。一八四三年に神田で生まれた七五三太は、二十一歳でその生涯を閉じたも同然である。新島民治は安中藩庁に「息子は箱館沖で測量中に難破に遭遇して行方不明」と届出た。戸籍的には死者扱いであるが、現実的には息子は上海でジョーに再生していた。

七五三太とジョーでは、別人ほどの違いがある。名前や身分の点で上海が新島の生涯にとって分岐点になったからである。I期で身についた誇り高きサムライ意識は、函館を出る時も抜けなかった。ちよん鬻をおろすことにも抵抗があった。真夜中にこっそり小舟でベルリン号まで運んでくれた福士卯之吉(成豊)の忠告にもかかわらず、丸腰になれずに二振りの佩刀を船に持ち込んだ(田中兎毛「福士成豊に約す」三二頁、『新島研究』五一、一九五四年一月)。刀は二代目國助の作で、銘は「笹丸雪」と打たれた(河内國平「新島襄帯刀國助とその系図」七七頁、『同志社談叢』一九、一九九九年三月)。

ところが船が上海に近づく頃、新島に劇的な心的変化が生じる。鬻を切り落とし一部(新島遺品庫に現存)を残して、北上する黒潮に船上から投げ込んだ。上海ではテイラー船長に船賃代わりに大刀を差し出す。続いて香港では、漢訳聖書購入のため小刀を船長に買ってもらった。

鬻と佩刀(由緒ある名刀ならばなおのこと)を手放すこ

とは、「サムライの魂」と訣別する決死の行為である。後年、新島が板垣退助に対して「新心を得、新民となるる」ようにと勧めた文言(③二五四)を新島に当てはめると、「新心」を得て「新民」へと転身する精神革命が東アジアで生じたのである。サムライから信徒への大転換である。

新島の教え子、波多野培根は「新島先生の生涯の運命」は「ワイルド・ローヴァー号に乗込まれたる時に決定した」と見る(『新島先生記念集』二二五頁)。一方、函館在住の片山幽吉牧師は、新島の運命は「函館の地で確定した」と解する(同「新島先生の脱国と記念会堂の建設」、『基督教世界』一九三六年四月二日)。

しかし、新島自身は上海での乗船を「大幸の基」と断定するので(③四三)、上海の方が妥当であろう。

ハーディー家での養育

新島はアメリカ上陸後に「大幸」に恵まれ、三つの学校で学び、信徒、牧師、宣教師へと進化する。すべては「アメリカの父」のおかげである。

ハーディーはポストン有数の篤信の信徒(会衆派)で、由緒あるオールド・サウス教会(会衆派)で会計を務めた有力な教会員であった。マサチューセッツ州の名門校(いづれも会衆派系)であるフィリップス・アカデミー(ハイスクール。ハーディーの母校)、アーモスト・カレッジ(大学)、アンドーヴァー神学校(大学院)の理事を務めていた。さらにアメリカ最古のミッション、アメリカン・ボード

(会衆派)の理事長格でもあった。

新島はハーディーによって送られた先の三校で濃密なキリスト教主義教育を享受して信徒、牧師となり、最後はアメリカン・ボードの宣教師にも取り立てられた。Ⅱ期で獲得したこれらの資質や資格は、そのまま日本に持ち込まれてⅢ期で花開く。

すなわちⅡ期とⅢ期は緊密に繋がる。名前や資質、身分の点でも共通性が見られる。これに対してⅠ期とⅡ期のステージはあきらかに相互に異質で、断絶する。両時期の人間性には別人かと思われるほどの大きな格差があるのに対して、留学中の新島と帰国後の新島は、諸種の点で首尾一貫し連続する。新島の人生上、上海を分岐点と捉える所以である。三段跳びに準らえると、品川からホップした新島は函館でステップし、上海で高くジャンプした結果、ポストンに無事に着地できたというわけである。

かくしてポストンの家庭、学校、教会、社会で培われた新島の会衆派的素養は、そっくり同志社に持ち込まれる。たとえば新島の抱く教育理念・方針の基底をなす会衆主義は、そのまま同志社の基盤に据えられた。すなわち、新島の思想と



③ワイルド・ローヴァー号(同前)

行動の基軸だけでなく同志社の骨格が形成される出発点も上海であった。端的に言えば、同志社の源流は上海である。上海は新島個人の運命を決定したうえ、同志社の運命(骨格)をも確定した。上海での新島とテイラーの邂逅が、後にボストンにおいて新島を「ハーディー・ワールド」へと導く。つまりは同志社の開校は、新島が上海でジャンプしたその延長線上に浮かび上がってくる出来事である。

その点を意識して私は、二〇〇四年に室町校地に寒梅館が竣工したとき、ハーディーとテイラーの功績を末永く記念するため、館内の大ホールを「ハーディーホール」、小ホールを「テイラーホール」と命名する提案をした。前者は実現したが、後者は落選し「クローバーホール」になった。私的には「アメリカの父」と共に「アメリカの兄」の名を合わせて寒梅館に刻みたかった。

四人目の船長 A・バートレット



④A・バートレット元船長

ところで、テイラー船長はボストンに帰港するや船主のハーディーに、養父となって教育を授けてほしいとの新島の要請を取り次いだ。しかし、それ以上のことはテイラーの力量を超えた。別の助っ人が必要であった。

そこへ登場するのが四人目の船長、A・バ

ートレットである。彼に関する従来の情報は、ミッシヨン機関誌に掲載された一文、「その頃「ボストン」に到着した」この日本青年「Joe」とよく会っていた」だけであった(拙著『新島襄と建学精神』三七頁。「」は本井、以下同)。その後のボストン現地調査で、無事にアメリカに着地した新島が、合法的なアメリカ入国という密航の総仕上げを成し遂げるには、バートレットの援助が不可欠であることが判明した。

ハーディーが新島から渡米理由を聞き出すには言葉の壁が厚すぎた。そこでハーディーは自分が理事長を務めるボストン船員ホームに彼を泊め、専属チャプレン(宗教主事)に新島の指導を依頼した。新島が二泊三日をかけた周知の「脱国理由書」にハーディー夫妻が合格点を与えたので、新島は同家に養子同然の身で入ることが許された。

八年間に及ぶアメリカでの恵まれた留学生生活(大幸!)を保障してくれたこの英文文書(原文は⑦三〜二八)は、当時の新島にしては長文で、しかも宗教的にも見事な出来映えであったので、従来から単独執筆とは言い難いと疑問視されてきた。無理もない。現実にはインストラクターがいたのである。バートレットである。新島は彼の指導を受けて英文祈祷文(写真⑤)も作成している。

祈祷文の原物(メモ)は現在、学内の新島遺品庫にある。日付は船員ホームに入所した翌日(一八六四年十月十二日)である。メモは長くバートレットが所持していたが、後に同志社に寄贈されたことから新島との師弟関係が窺える。

ちなみにメモの英文署名 (Joseph Nei-Sima) も特筆すべきである。ジョゼフを名乗った初例だからである (拙著『ビーコンヒルの小径』、一四三頁)。あるいは、ジョゼフへの改称はバートレットの発案か。

彼は神学教育を受けた正規の伝道師や牧師ではなく、信徒で、元々は船長であった。人柄や信仰、指導力を見込まれてポストン船員ホームのチャプレンに抜擢されて陸に上がり、施設を利用する船員たちの宗教的指導を任された。彼をホームに招いた人物こそ、ハーディー理事長であった (同前、一二五頁以下)。

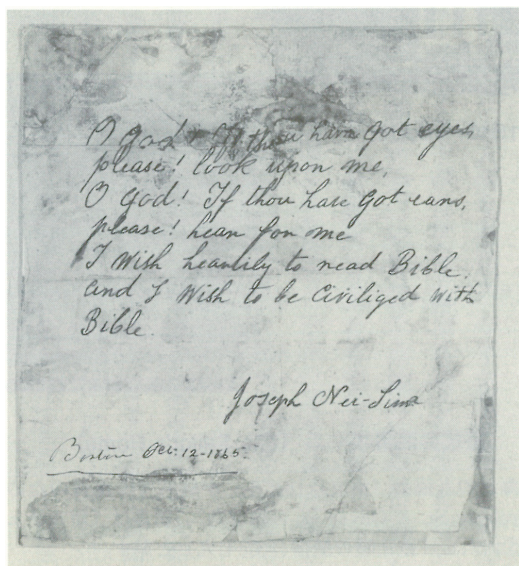
理事長の期待に依ってバートレットは、新島が脱国理由書を作成するのに必要な英作文ばかりか、内容を信仰的にブラッシュアップするのにも適切な指導をした。

ちなみに彼は各船舶に洋上図書室を設けることにも熱心であったので、当然ワイルド・ローヴァー号にも宗教的な書物を備えた部屋かコーナーがあったはずである。新島は当時の「航海日記」に「甲比丹 (キャプテン)、予ニバイブルを与へり」と記すが (⑤四六)、バイブルが船内備えつけのものであれば、これ又バートレット効果である。

Joseph Grimes・ニュー

バートレットの扶助によって入国できた新島を紹介した新聞記事が二件 (AとB) ある。フリーライターの小木谷涼子氏提供の新資料で、私訳で紹介したい。

記事にはバートレットへの言及があるので、ニュース



⑤新島襄の最初の祈祷文 (拙著『ビーコンヒルの小径』142頁)

ースは彼か。祈祷文ばかりか、異邦人 (異教徒) の回心例として新島が格好の証人であることをバートレットは地元市民に伝道上げひとも伝えたかったに相違ない。

なお、新島の祈祷文原文も記事に収録されているが、新島は脱国理由書でもこれを引用している (⑩二〇)。

A 『クリスチャン・ミラー』 (一八六五年十一月七日、ポ
ートランド、メイン州)

「ポストン通信 (ポストン、一八六五年十一月二日)

日本の青年、ジョゼフ・ニイシマ (Joseph Nei-Sima) は、



⑥W・T・セイヴォーリー船長

かつて祖国ではある地方「上州安中」の支配者（princes）のひとり「安中藩主の板倉勝明」の家臣であったが、最近、当市にやってきた。

異教徒でありながら真の神に関する知識を熱望する実例として、彼の履歴は興味深い。神主（Kanusu）、すなわち聖職者が説いてきた日本古来の宗教である神道に、子どものころから慣れ親しんでいたが、太陽や諸々の自然物を崇拜することに彼の心は満足しなかった。

彼は太陽を創られたのは人格的な神であると思ったので、キリスト教の真理を知りたいと望むようになった。父親も支配者「藩主」も彼が家を出ること「脱藩」を禁止したが、彼を止められるものは何もなかった。

彼は密かに身を隠して「函館から密航し」、種々の体験を経てついにポストンに達した。ここでは善良なバートレット船長（Capt. Bartlett）を知りこした。

あるポストン商人「A・ハーディー」が、彼の教育に当たろうとしているが、この商人は市内の全教会で称賛されている「著名な信徒である」。ニイシマは、「アンドーヴァーの」フィリップス・アカデミーに入ることになっていると先週、私（T.P.E.）に語った。祈ったことあるのか、と聞いてみたら、あると答えた。何を祈ったのかと聞くと、彼は鉛筆で次のように記した。

『ああ神よ、あなた〔Thou〕が耳をお持ちであれば、どうか私に耳を傾けてください！私は心から聖書を読んでみたいのです。ジョゼフ・ニイシマ』。

キリスト教の真理を求めたいという彼の熱意は人を感動させ、一般の人たちの無関心とは対照的である。他の多くの者たちは、福音の恩恵にあずかることに全生涯をかける口では強調するものの、恩恵については何の関心も示さずとはしていない。〔後略〕。

B 『ニューヨーク・オブザーバー&クロニカル』（一八六五年十一月九日、ニューヨーク市、ニューヨーク州）

「日本人の祈り」

ポストン市パーク通り教会〔Park Street Church〕の週間祈祷会において、最近、船員宣教師（sailor missionary）のバートレット船長（Captain Bartlett）が、傍に座らせたある日本人青年のことを話題にした。

青年は「江戸から函館を経て」中国「上海」に行き、「香港で自分が」読める「中国語訳」聖書を見つけた。そして真の神と永遠の生命についてもっと学ぶために逃亡し、この国に来るためにあれこれと骨折って活路を切り開いた。

「ハーディー商会のオーナーである」アルフィーアス・ハーディー卿（Alpheus Hardy, Esq.）が所有する船の一つ〔the Wild Rover〕に「上海で」乗りこみ、青年は「ポストンに」来た。ハーディーは、好意的に彼の教育を引受けた。青年は、自分が有為の人間になるのに相応しい努力



⑦H・S・テイラー船長夫妻と新島襄（テイラー一家アルバム）

を重ねることを約束した。彼の決意は次の祈りからも明白である。この祈りは、彼が手ずから上手な字「英語」ではつきりと書き下ろしたものである。

『あぁ神よーあなた「thou」が目をお持ちであれば、どうか私に注目してください。あなたが耳をお持ちであれば、どうか私の声に耳を傾けてください。私は心から聖書を読んでみたいのです。聖書で教化していただきたいのです。ジョゼフ・ニイシマ』。

これぞ『神を慕う感覚』ではないか。この青年こそ、『マタイによる福音書』八章十一節にある「東洋と西洋からやってきた人ではないだろうか。J.W.C.」。

Joeから襄に至る道

以上の報道は新島の留学開始を告げるプロローグとなった。一方、エピソードを飾る報道はよく知られている。日本に帰国

する直前のラットランド集会に関する記事（『ラットランド・ウィークリー・ヘラルド』一八七四年一〇月十四日）である。半世紀前、『同志社百年史』通史編Iの冒頭でスクープとして公表（日本語訳）されたので、今では新島伝中、周知の集会である。

ところで、ラットランドの報道では新島の名前は Joseph Neesima とある。しかし、報道前日（十月十三日）に認めた手紙では Joseph H. Nee-Sima と自署し、ミドルネーム（Hardy）を挿入したと付記する（⑥一四四）。名実ともに「ハーディー夫妻の子」となったわけである。こうして七五三太として出国した新島は、Joseph Hardy Neesima となつて帰国する。実際、彼にとってハーディー夫妻は「実の両親以上」の存在であった。「私はお二人様の愛によって誕生した者」と自認する（⑩三二八）。

一方、日本語名が新島襄と確定するのは、Joe 誕生十年を経た一八七四年の横浜においてである。手紙の署名では「襄」に「ジョフ」とルビを振ったうえ「ジョフセフの略也」と注記する（③一二五）。

ともあれ新島の個人名は、Joe に始まり襄に落ち着くまで種々の変遷が見られたが、日英両語とも系譜的にはアメリカの兄と父に由来するテイラー・ハーディー・ラインに一貫して沿う。その点、Joe が生まれた上海はその出発点であるばかりか、その後の飛躍が約束された飛躍の地にもなった。ポストンではハーディー夫妻の子となる「大幸」が Joe の到着を待ち受けていた。

大学

情報化社会と記憶術

文学部英文学科助教

円浄えんじよう
ゆり

日本社会が情報化社会と呼ばれるようになって久しく、私たちの身の回りには多くの情報が溢れています。総務省のデータによると、モバイル端末を保有する世帯は、2021年時点で97パーセントに達したそうです（令和4年情報通信に関する現状報告）より）。コロナ禍以降、ビジネスや教育現場で、情報通信技術（ICT）の活用が積極的に行われ、子供から大人まで、幅広い世代でモバイル端末を使用する機会が増えました。大学ではオンライン授業の実施体制が整備され、学生がスマートフォンを用いて授業動画を閲覧したり、レポート課題をオンライン上に提出したりすることが当たり前となりました。その一方で、いわゆる「スマホ依存」や「スマホ脳疲労」といった、モバイル端末の長時間利用による弊害も意識されるようになり、特にソーシャル・メディアを介して受け取る情報量の多さをストレスに感じる人が増加しています。情報通信技術の利用が日常生活に浸透し、パソコンやスマートフォン無し

の生活が難しくなってきた今こそ、溢れ出る情報に対して、賢く向き合い、対処する技術が必要です。

私は16・17世紀の英文学研究者として、人文主義学者のエラスムスが提唱した記憶術が、情報化社会において見直されるべきだと考えています。エラスムスは*De Copia*の中で、読書の際に記憶すべき情報を見かけたら、その情報を抜き出し、項目ごとに並び替えた上で暗記するようアドバイスしています。エラスムスの考えでは、この作業を繰り返すことで、頭の中に、ページの尽きない仮想ノートを作り上げることが可能で、学習者は記憶の中の仮想ノートを参照することで、記憶情報にいつでもアクセスできる状態となります。

ルネサンス期の記憶術から私たちが学べることは、パソコンのない時代にも、情報を体系化して保存するという整理術が存在しており、時代が移り変わっても、人間の性質は変わらないということです。そして、情報化社会を生きる私たちにこそ、情報に溺れぬよう、自己の価値観で情報を整理し記憶する、人文主義的情報管理が必要なのではないでしょうか。

女子大学

共同体というケアの在り方

学芸学部音楽学科准教授

北脇 歩きたわき あゆむ

二十代後半、ある強い想いを胸に抱き、単身アメリカへ渡った。計十四年過ごしたのだが、帰国までの十年ほどは、現地で訪問ホスピススタッフとして奉仕の機会が与えられた。これはそこでの気づきの話である。

「なぜアメリカにまで来て、この分野の仕事を望むのか。」採用面接での最初の質問である。死別による深い悲しみが全ての動機であり、終末期ケアの学びと実践経験を積むための渡米であり、帰国後母国でケアを求められる人を支えられる自身の成長を強く願っているからだ、と真摯に伝えた。採用の返事を頂いた際、その理由の一つとして、私の想いと共鳴する、ある感覚が決めたかったようだ。

私を含むそこで働くスタッフの九割以上が、元は別の医療領域、または全く異なる業種であったが、個々の死別体験、その際受けたケアへの感謝の気持ちが大きな転機となり、新たに終末期ケアについて学びを深め、それぞれの資格を取り、皆このチームに加わることを望んだのだ。自身

の体験が生む共感、言い換えれば『自分事感覚』がこの『共同体』を形成していた。しかし、この『共同体』はスタッフ間だけのものではなく、スタッフの大半がかつては患者の家族であったように、患者や家族との関係性もまた『共同体』である。残念ながら我々は、患者本人の気持ちに本当の意味で共感できないのだ。しかし、人の数だけ存在する人生の物語を通し、苦しみや喜びを互いに受け止め、支え合い、成長し合う『共同体』には成れる。

ある患者は戦争体験の苦しみを誰にも言えず長年苦悩したことを、ある患者は妻子を残していく無念さを、ある親は先立つ幼い我が子との天国での再会の願いを、ある患者はついに神に出会える喜びを分かち合った。残された時の中、彼らは問い続け、気づき、受容する。私は傍でその過程に寄り添い、時に支え、その瞬間を共に生きる。ある時は感情任せの荒い言葉を受け止め、ある時は音楽の中で表現された言葉にならないメロディーに音楽で共感し、またある時は無言で涙を流し合うこともあった。目の前のその人々に対し、自身がどう在るべきかが問われる実には人間的な行為である。人と人が互いに成長し合う『共同体』、それはケアの核なのかもしれないと気づかされた。

国際中学校・高等学校

「同志社」との出会い

宗教科教諭 西原 にしはら ももこ

私の受け持っている高校3年生の授業では出エジプト記「モーセの召命」を通して自分の人生やアイデンティティについて考える単元がある。授業準備の段階で担当者自身の人生についても振り返り、そのたびに同志社との出会いがなければ今の自分はいなかったと再認識させられるのである。

今でこそキリスト者としての歩みを与えられているが、クリスチャンホームの生まれでない私が聖書に出会ったきっかけは女子中学校に入学したことである。祖母が女子大音楽科出身だったこともあり、大学の音楽科入学を志していた。しかし、中高時代の聖歌隊での活動、毎朝の礼拝、クリスマスページェント、聖書の授業を通してキリスト教に興味を持ち始めた。そして高校3年生の8月に全国同信伝道会（同志社大学神学部・研究科出身の牧師・伝道師などで構成された団体）主催のキャンプに参加し、神学部の魅力を感じたため、急遽進路変更をし、神学部に入學する

こととなる。

1年生の時はやっと自由を与えられたという解放感から自分の好きなことをし、趣味に没頭していた。自分はこのままで良いのだろうかと考え始めた2年生の秋ごろから進路について悩むようになり、一応教員免許を取得しておくかという安易な考えのもとに勉強にも力を入れ始めた。3年生になり、周りの多くの学生と同じように就職活動をし、卒業と同時に一般就職すると思い込んでいた矢先、(色々なことが重なり)母校での聖書科講師の道を与えられた。歌にしか興味のなかった私が、まさか教員になるなんて、と当時は周りの人たちに驚かれた。

これまでの歩みを振り返るとき、自分がこうだ!と想った人生をほとんど描けなかった。しかし多くのターニングポイントの中で、人との出会いが与えられ、周りの人に支えられて生きてきたと思わされる。まもなく「同志社」に関わって20年目を迎えようとしている。生徒たちと関わっていると毎日思いがけないことの連続だが、「今の自分も嫌いじゃないな」と思う今日この頃である。



今出川キャンパス「寧静館(ねいせいかん)」が2023年8月に竣工しました。
館名は改築前の館名である「寧静館」を受け継いでいますが、これは徳富蘇峰により諸葛孔明の言葉「寧静に非ずんば以て遠きを致むるなし」から命名されています。

建物は、鉄筋コンクリート造の地上4階・地下1階・塔屋1階、延床面積は約4,500㎡です。外観は、今出川キャンパスの歴史ある既存校舎群が形成するキャンパスの風景に調和する赤レンガを基調としています。また、南側のエントランスは、旧寧静館のシンボリックな正面ファサードのモチーフを引用した意匠とし、伝統あるキャンパスの記憶を継承しています。地下1階と1階には図書館(新図書館建設期間のみ配置)を、2階から4階には14の教室と1つの会議室を配置しています。教室は、将来の間仕切り変更を見据え、改修工事の自由度が高くなるよう設計されています。

なお、竣工式は、8月25日に総長・理事長、学長をはじめとする大学関係者および設計監理会社(株式会社日建設計)、施工会社(戸田建設株式会社)の出席のもと、同志社礼拝堂にて執り行われました。

聡恵館

(同志社女子大学)



1990年、田辺キャンパス（現・京田辺キャンパス）第3期工事により竣工。知徳館にあった図書館田辺分館を聡恵館に移転させ、演習室や事務室、書庫などを備えた6階建ての建物が完成しました。その後、2005年に西館が完成し、もとの聡恵館（東館）と西館がつながり、分散していた音楽文献室、AVライブラリーも図書館に統合されることになりました。

2018年には増築工事を行い、学生のための創造的学習空間「ラーニング・コモンズ」が開設。図書館と一体化した「ラーニング・コモンズ」は、イベントエリアやグループワークエリア等で構成され、学生が多様な学びに触れて刺激し合えるように、ガラス壁を多用した開放的なスペースとなっています。

また、聡恵館増築部分の外壁には「Veritas liberabit vos（真理はあなたたちを自由にする）」という文字が刻まれています。メディア創造学科の高木毬子教授が「Alverata」というフォントを海外から取り寄せ、文字組みを通して、一文字ずつ間隔を整えて刻まれたものです。伝統的なヨーロッパ中世の手書き文字、刻印や活字の形にインスパイアされ、現代のデザイン思考や知識を織り込んでジェラルド・ウンガー（1942-2018）によりつくられたというこの書体は、“Always rising to a new challenge”を掲げる同志社女子大学の姿勢とも共鳴しています。

栄光館ファウラーチャペルのシャンデリア



同志社女子大学にとどまらず、同志社大学や同志社女子中・高の式典、毎日の礼拝、講演会など。多くの学生や教職員の記憶に残り続ける栄光館（国登録有形文化財）は、建築家の武田五一氏によって設計され、1932年に、同志社女学校の校舎（礼拝堂・講堂）として完成しました。

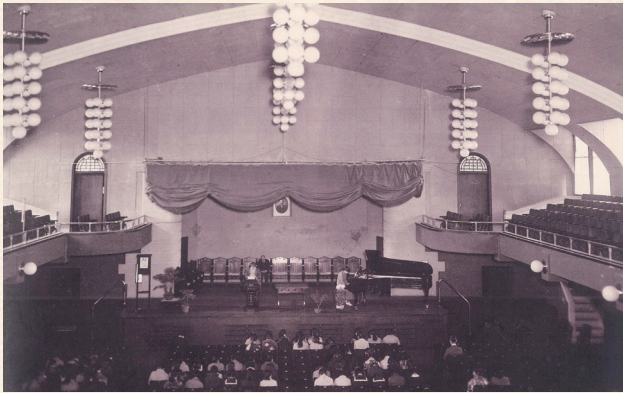
竣工当時の栄光館ファウラーチャペルの天井には、真鍮の骨組みに「葡萄の形」を模したシャンデリア照明が、2階客席部の壁面及び天井面には、グローブ球のブラケット照明と円形のシーリング照明が設置されていました。当時、完成したばかりの栄光館ファウラーチャペルでは、新島八重の葬儀が同志社葬として厳粛に執り行われました。

しかし戦時中、武器・砲弾を作るために、真鍮製であったシャンデリア照明は軍事物資としての金属供出の対象となり、撤去されてしまいました。1956年に蛍光灯型のシャンデリア照明が復活しましたが、竣工当時とは異なるデザインのものでした。

2012年、栄光館の改修工事にとともに、ファウラーチャペルもその対象となり、シャンデリア・ブランケット・シーリング照明が竣工当時の形に復元されることとなりました。復元する際は、竣工当時の写真や残存していたガラス球をもとに、シャンデリアの大きさや形を細かく推察。台座や骨組み、飾り金物は当時と同じ真鍮製にこだわり、細かい部分まで当時の趣きを再現しています。一方、照明には省エネやメンテナンスに配慮したLEDを使用し、ガラスの止め付け方法や落下防止装置を施すなど、安全性にも配慮したものとなりました。

再び、同志社女子大学の象徴としての誇りをたずさえ、栄光館ファウラーチャペルのシャンデリアは、温かい輝きを放ちながら、今日も私たちを見守っています。

(同志社女子大学 広報課)



竣工当時のファウラーチャペル（1935年3月卒業アルバムより）



改修後



改修前

〈栄光館2012年改修工事〉



大学

参与観察を通して 大衆文化の本質を明らかにする

社会学部助教 マティアス・ヴァン・オメン

自ら参加し体験することでリアルを伝える

参与観察 (Participant Observation) という社会調査の手法を通して、普段私たちが楽しんでいる様々な文化や習慣、伝統、コミュニティ等を体感的にとらえようと考えることができます。自分自身がアクターとしてその環境に身を置くことが大切で、他の参加者と一緒に活動し内側から観察することで、新しい発見につなげていくことが可能となります。

私を取り組んでいるのはデジタル社会、特にオンラインゲームにおける参与観察です。コロナ禍を経てデジタル商材の売行きが伸びている中、子どもがずっと部屋でゲームばかりして心配だという声が多く聞かれるようになりました。世界保健機関 (WHO) はゲーム依存に対して注意喚

起を促す一方、ソーシャル・ディスタンスを守るためにゲームを推奨するなど、その判断基準はたいへん曖昧なものになっています。

バーチャルの世界と言うと、親世代にとっては何となく理解しがたい、受け入れがたいと思うかもしれません。コロナ禍でゲームをする人が何パーセント増えた…という数字だけでなく、表面から見えない部分、例えばそれがどのように現代社会を反映し、私たちの生活にどんな変化をもたらしているのか…。参与観察による実体験に基づいた言葉で分かりやすく説明することで、ゲームをする人としての人の間を橋渡しできるのではないかと考えています。

共通体験を通して育まれる強固な絆

私は7年くらい前からある人気オンラインゲームに参加

社交場としてのバーチャル空間

し、そこで親しくなったコミュニティメンバーに個別インタビューを実施したり、チャットログを解析したりしています。ゲームの世界では、クリエイターが提供する本来のストーリーとは別に、ユーザーが中心となって作り上げるイベントも盛んに開かれています。ゲームを通して知り合った仲間同士がバーチャルの世界で結婚式を挙げることも少なくありません。新居用に土地や家を買ったり、他ユーザーにギフトを贈ったりすることも可能です。

ゲームでは自分の役割分担やチャレンジ目標が明確で、達成感や満足感がお互いの信頼や絆にダイレクトにつながりやすいという傾向があります。バーチャル世界で結婚したカップルにインタビューすると、「ドラゴンを倒すのにこんなに苦労した」というような一緒に困難を乗り越えた経験の話題がよく出てきます。定量的なデータはありませんが、例えば東京や大阪、名古屋などにあるゲームの世界をテーマにしたコンセプトカフェを利用し、リアルな場での出会いを楽しむ人も増えています。ゲームを一つのフレームワークとした共通体験を通して、それこそアイコンタクトで通じ合う独自のコミュニティがそこに作り上げられているのです。

最初、オンラインゲームのプレイヤーは学生など若いメンバーばかりかと思っていました。私が所属するコミュニティは会社員や主婦層が中心で、「普段とは違う自分を表現したい」「誰かと会話を楽しみたい」という積極的な理由で忙しい合間を縫って参加している人が多いこと気づきました。いつも駅ですれ違うあの人が、実はバーチャル世界でドラゴンと一緒に倒す仲間かもしれないのです。少し前までゲームは、一人で部屋に籠って楽しむイメージであり、いわゆるオタク文化の一部であると考えられていました。今回の参与観察を通して透かし見ると、社交性を持った人たちが集まり、独自のインティマシー、つまり友情や愛情を育みながら、豊かな時間を費やす居心地の良い場に変化していることが明らかになりました。

世の中には、実際に経験してみなければ理解できないモノ、コトがたくさんあります。バーチャルの世界だけでなく、例えば自分たちが住む地域や学校の活動に参加することで、今までの考えや視点が変わったり、家族や友人との関係性を深めたりすることができるかもしれません。

日本流コミュニティスタイルの面白さ

例えば、オンラインゲームの中で新しいコミュニティメンバーを募集するときに「社会人に限る」という制限を設けるとか、イベントが終わった後は「お疲れ様」と言ったりログアウトしなければいけないとか、日本人にとっては当たり前なことでも、外国出身のユーザーから見ると不思議に感じる場合があります。その人が本当に社会人であるかどうか、また社会人とはどういう意味なのか、判断することとは難しいでしょう。現実社会のビジネスカルチャーが、仮想であるはずのバーチャル世界にそのまま投影されているのは日本独特のスタイルと言え、たいへん興味深いと思います。

これまでオンラインゲームのプレイヤーとして参与観察に取り組んできましたが、次はゲームを開発するクリエイターの立場からバーチャルの世界を調査・記録していきたいと考えています。私が担当するゼミ活動では、2023年7月に京都で開催されたインディーズゲームのイベント「BitSummit」を訪ねて、クリエイターやユーザー、ディベロッパーなどへインタビューを行いました。ますます多様化・複雑化する現代社会において、ゲームだけでなく、

XRなど新しいメディアにも関心を広げ、独自の目線で大衆カルチャーを読み解いていきたいと考えています。



大学

速く走ることができ身体への興味

スポーツ健康科学部・准教授

わかばら
若原

たく
卓

世界記録保持者の測定をきっかけにして抱いた興味
学術的な理解から実践へ

私は、陸上競技1000m走・2000m走種目の世界記録保持者である、ウサイン・ボルト氏の身体を測定したことがあります(図1)。2011年9月のロンドンと、2012年5月のローマで測定を行いました。いずれも、ボルト氏を特集するテレビ番組の取材に協力する形で実現しました。彼の身体に関するいくつかの測定を行いました。さまざまな制約もあり、なぜ彼が驚異的な速度で走ることができるのか、という本質に迫ることはできませんでしたが、ボルト氏が樹立した1000m走、2000m走の世界記録は、10年以上経過した2023年でも、いまだに破られていま

せん。この間に道具(スパイク)やトレーニング方法が進化していることを考慮すると、彼の偉大さを実感します。私自身、速く走ることへの憧れは小さい頃から持っていました。ボルト氏の身体を実際に測定したことで、速く走ることができ身体に対して、より強い興味を持つきっかけとなりました。

私は、ヒトの骨格筋やそれにつながる腱を対象とした研究を実施してきました。比較的マクロな視点から、骨格筋・腱の形態と機能の関係や、筋力トレーニングによる変化に



図1 ボルト氏の脚を測る筆者

関する研究を進めています。私自身に陸上競技の経験はありませんが、ゼミ学生や大学院生には陸上競技の経験者が多く、そうした学生さんたちに協力してもらいながら、短距離走選手を対象とした研究にも取り組んでいます(Takahashi et al.2021, 2022など)。こうした研究活動を通して、速く走るための身体に関する私自身の理解も徐々に深まっています。

そうした中で私が感じていたことは、「もし仮に、中学生頃から今と同じぐらいの知識を持って、短距離走の練習・トレーニングを行っていたら、どれだけ速く走れるようになったのだろうか？」という疑問です。「もしかしたら、100mを10秒台で走ることもできたのでは!？」と勝手な妄想を抱いていました。ある時、『過去にトレーニングしていたら』と考えていてもしかたがないので、今からでも速く走ることを目指してみよう!』と思いました。特に何かきっかけがあったわけではありませんが、そう決意しました。これが2020年の冬で、私は40歳でした。

その頃の私は、週末にジョギングをする程度で、短距離を全力で走る、というような運動をまったく行っていませんでした。そこで、手始めに100m走のタイムを測ってみることにしました。2020年12月29日、大学は冬休み

期間に入り、ほとんど人がいません。誰もいない京田辺キャンパスの陸上競技場へ行き、ストップウォッチを片手に100mを走ってみました。結果は、14.29秒でした。年が明けた2021年から、速く走るためのトレーニングを開始しました。大学教員としての仕事や家庭での役割もあるため、トレーニングに充てることできるのは1日の中で10〜20分程度です。内容は、家の近所での全力疾走や、筋力トレーニングです。筋力トレーニングは、ジムには通わず、仕事の合間に行っています。学術論文の知見を参考に、短距離走パフォーマンスと関連があることが示された筋肉を中心に鍛えています。

速く走れるようになるために、私自身の身体を測定・評価しています。私の実験室には、超音波画像装置(いわゆるエコー)が設置されています。エコーを使って、腹部皮下脂肪厚や腹直筋厚を測定し(図2)、速く走るために余計な脂肪が蓄積していないか、定期的にチェックしています。

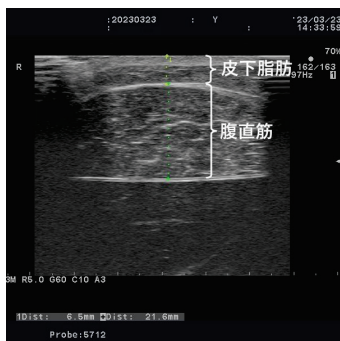


図2 腹部の超音波画像

また、授業や研究の一端で、医心館のMRI装置を使用させてもらっています。授業の終わり際や予備実験などで、自身のMRIを撮影してもらいます

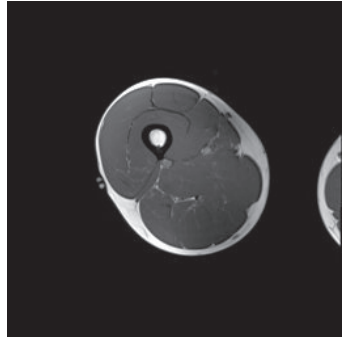


図3 大腿部のMRI

(図3)。MRIでは、一つひとつの筋肉の体積を評価することができます。短距離走選手は、お尻の大殿筋や太もも裏側のハムストリングスの体積が大きいことがわかっていますが、私はもともと肥

大させる必要があります。100m走のタイムは、光電管という装置を使って測ることができます。大学院生の実験を兼ねて、自身の100m走タイムを測定してもらっています(図4)。2021年9月は13.57秒、2022年4月は13.04秒、2022年10月は13.14秒でした。当初に比べて1秒以上短縮しており、当面の目標は12秒台のタイムです。2023年になってからは100m走タイムを計測できませんが、2024年にはマスターズ大会に出場し、公認記録を計測してみたいと考えています。

私の家系は比較的長寿です。4人の祖父母はすでに亡くなってしまいました。そのうち3人はとても長生きでした。私も不摂生をしなければ、長く生きられると期待しています。



図4 100m走タイムの計測

そんな私の目標は、100歳で100m走のマスターズ日本記録を樹立することです。スポーツ科学の研究と実践を結び付けて、50年後に達成したいと思っています。

Takahashi K, Kamibayashi K, Wakahara T. Muscle size of individual hip extensors in sprint runners: Its relation to spatiotemporal variables and sprint velocity during maximal velocity sprinting. PLoS One. 2021, 5:16(4):e0249670.

Takahashi K, Kamibayashi K, Wakahara T. Gluteus and posterior thigh muscle sizes in sprinters: Their distributions along muscle length. Eur J Sport Sci. 2022, 22(6):799-807.



女子大学

子どもが育つ環境創造のために

生活科学部准教授

塚田 つかだ由佳里 ゆかり

居住空間を快適にする創造力を養う住居学

生活科学は家政学を前身とし、家事学や良妻賢母教育のイメージが根強く残るかもしれませんが、今日では家族・家庭生活を核に個人・人間生活全般を対象とする「暮らしの専門家」の養成を使命とします。生活科学は暮らしの発展・向上を目指し、人が人らしく生き、より豊かな人間生活を創るための条件を生活者・消費者の視点から科学的に解明・追究・実践する問題解決学です。生活を考えるためには専門分野だけでなく異なる専門分野との協働や多角的視点が不可欠で、研究成果を現実社会へ還元することが重視される文理融合・学際領域に位置づく独自の学問なのです。

私の専門分野は住居学と建築計画学です。伝統的住居の住空間と暮らし方・住文化を見つめ、住居の見方や選び方を学び、現代家族・個人の暮らし方からみた居住空間のあ

り方を考える「住生活学」、住宅や店舗等の居住空間を計画・デザインするための計画理論や設計手法を学ぶ「住まいの計画学」「インテリアデザイン論」、講義の学びを基に居住空間を設計・デザインする実習を担当しています。「住まいの計画学」では暮らしが大きく変容する明治時代以降に日本の住居がいかに発展してきたのか、専門家・建築家によってどのような住宅が生み出され、現代住宅に至っているのかを学びこれからの居住空間を考えます。身近な環境であっても住居について学べるのは工学・芸術系大学の建築学と生活科学系大学の住居学のみ。建築学では生産者・ものづくりの視点からアプローチするのに対して住居学では居住者や生活スタイルを出発点として暮らしやすい住空間を考える点が特長で、生活者としての生活経験、感性、問題意識を活かせるのが魅力です。

ライフワークは「放課後の居場所づくり」研究

学生時代から取り組んでいる研究テーマは「放課後の居場所づくり」です。特に共働き・ひとり親家庭の小学生が放課後や長期休暇中を自宅の代わりに過ごす学童保育所・児童館の施設計画・整備手法を研究していて国内唯一。日本の認可保育所の施設水準は世界的にみても高水準ですが、共働きが主流の今日であっても社会インフラ施設である学童保育所の施設整備はかなり遅れています。

空間課題の一つは生活空間の乏しさです。過半数の学童保育所は小学校内に設置され、余裕教室の転用や簡易建物や建築して場所を確保しています。ところが四十名の子どもが一室空間で過ごし、静養・クールダウンスペースもなく調理設備もなく、遊びや生活に支障が多いのが現状です。もう一つの空間課題は子どもを囲い込む居場所づくりが進んでいる点です。子どもが学校内で放課後を過ごすことは事故・犯罪に遭うリスクが少ないため親にとって安全安心ですが、子どもの育ちという観点が希薄なようです。朝から夕方まで一日中、子どもは学校内で過ごし、自宅周辺に広がる地域空間で近隣住民と交流したり、地域社会・地域文化に触れる機会が減り、生活体験を得にくくなっています。放課後は本来課業から解放された自由時間であり、

誰とどこで遊ぶか、何もしないことや休むことも含め、子ども自身が自ら選択・決定できる時空間が必要です。過度に管理された安全な居場所施設に子どもを囲い込むのではなく、居場所施設を放課後の生活拠点として位置づけ直し、子どもが地域空間へ出かけ、地域と関わって過ごせるように保育環境や地域環境を再構築していく視点が必要だと思います。このような考えに立ち、学童保育所・児童館を訪問し、現場スタッフ、利用者、自治体の声を聴き、子どもが育つ放課後の居場所のあり方を探究しています。

暮らして学んだフィンランドの住環境

国内で研究を進展させることに限界を感じ、学位取得後はフィンランドへ留学しました。なぜフィンランドなのか。きっかけは次の二つです。一つは建築見学のために訪れた教会で父子三組が木工する光景に出会った時です。平日夕刻に父子が共に集う光景は日本では稀で見かけません。「なぜこのように親子が触れ合う時間が持てるのか。フィンランドの暮らしや子育て環境を知りたい」と興味を惹かれました。もう一つはフィンランドが世界で最も子どもが自由に街を移動できる国だからです。世界十六カ国が参加した国際調査（二〇一五）によると、北欧諸国が上位を占め、フィンランドが首位でした（日本は五位）。移動自由性の

指標は「子どもだけで大通りを横断できるか」「子どもだけで自転車移動できるか」「暗くなつてから子どもだけで移動できるか」等子どもの単独移動が何歳からできるのかで測っています。交通事故・犯罪・迷子等に対する親の不安感が大きければ親は子どもの行動に制限をかけるをえません。子どもが単独移動できるのは安全な都市空間の印なのです。それはさておき、フィンランドで子どもが自由に移動できる背景には、小国で都市密度が低いことに加え、他者への信頼感が高く、自立・自律を重んじる独自の文化的価値観があるからでした。

公園が青空児童館―レイッキピイスト事例研究―

フィンランドでは保育園、学校、学童保育所・ユースセンター、公園、子育て支援施設・ネウボラ、図書館等を調査して廻りました。中でも注目しているのはレイッキピイストと呼ばれる公園で、110年の歴史を持ちます。原型は広場でしたが利用者ニーズを反映して改良され、現在は低年齢児向け遊具や屋内施設が整備された、誰にでも開かれた公園です。平日はスタッフが常駐して子ども達の安全を見守ってくれ、午前は乳幼児連れの親子を対象とした子育て支援プログラムが行われています。親同士が知り合う場にもなっており、キッチンではコーヒーを飲みながら子

育て相談する姿もみられます。午後は小学生が来所する遊び場となり、二〇二三年から屋内施設では登録児童向け学童保育が行われています。屋内施設の部屋は時間貸しも可能で、自治会の集会や子どもの誕生日会にも使われます。3ヶ月近くある夏休みには公園で「夏の食堂」が行われ、子ども達へ無料のスープが配られます。共働きが主流のフィンランドで定着している市民サービスです。このような日本とは異なる発想・コンセプトで作られた先進事例の仕組みや、建築空間とその使われ方を調査し、利用者ニーズや空間と人の行動の相互作用を読み解き、子ども施設の空間計画・設計へ活かすヒントを集めています。



レイッキピイスト



公共図書館の家族スペース



女子中高

中学三年生総合的な学習の 時間の取り組み

司書教諭

加藤 かつう

美穂子 みほこ

二〇二三年度から中学三年生の総合的な学習の時間は新カリキュラムとなりました。二〇二三年度は、二〇二二年度までの実践を元に、発表とそれに対するフィードバックの充実やデータリテラシーの育成を目指して計画しました。この授業に携わる者の一人として、一学期と二学期の内容をお伝えいたします。

中学三年生総合的な学習の時間「未来をみつめる」は、「SDGs から考える未来」(以下「SDGs」と「データで読み解く社会」(以下の「データ」)の二つの単元を両輪としておこなっています。二つを並行して進めていくことで、「未来をみつめる」全体の統一した目標達成を目指しています。一年を通じての目標は以下の通りです。

① 探究的な学習の課程において、教科の枠にとらわれず、正解のない課題を協働的に探究し続け、自己の生き方を

考え、探究的な学習の良さを理解する。

② 知的好奇心を持って日常生活や社会のさまざまな事象を観察し、それらを数理的・統計的に捉え、実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する力を養う。

③ 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、自分と異なる価値観や視点を持つ人の存在に気付き、互いの良さを活かしながら共に生きるために、「地の塩」「世の光」として積極的に社会に参画する態度を育む。

本校は聖書にある「地の塩」「世の光」となる自分の力を活かして社会の様々な方面で奉仕する心の豊かさを実行力を育てることを教育の理念としています。「未来をみつめる」は一年間を通じて、現代社会の抱える課題を知り、自分の身近なところから自分ができることを探すことで、

将来にもつながる学習経験を持つことを目指しています。

時間割は、二クラスを同時に行い、「SDGs」と「データ」を裏表として設定しました。二〇二三年度は、一期の「データ」で数学科の教員が全クラスの授業を担当し、一学期の「SDGs」は、主となる教員一名と司書教諭が全クラスの授業に入り、サブとなる教員が三名で二クラスずつ担当しました。二学期は、「データ」と「SDGs」を分けて授業を行い、教員は各クラス二名で担当しました。

一学期

一学期は、二学期に予定している発表に向けて、各自でテーマのSDGs目標・ターゲットに関する情報を集め、スライドにまとめました。また、並行して統計データの扱い方を学び、毎回学んだ内容に関して表計算ソフトを用いて実践しました。

当初は二時間連続の授業時間を「SDGs」と「データ」で一時間ずつ分けておこなう予定でしたが、作業時間の確保のため途中から二時間連続で一週おきに変更しました。二時間連続になったことで、課題に取り組む時間が十分に確保できました。

二学期

二学期は、授業のほばすべてを発表の時間としました。一人の八分〜十分の発表とし、それに加えて質疑応答をおこないました。発表に向けて、生徒は一学期から夏休みの間に作成したスライドに加え、レジュメを用意しました。スライドは提出後担当教員からフィードバックを受けて、修正・追加をしたものを用いて発表しました。また発表者それぞれに対して、発表の内容やスライド、レジュメ、グラフなどについて評価をつけ、どのようなことを学べたかコメントを記入しました。

当初は、その日予定された発表がすべて終わった後、クラス全体でその日の発表全体を通して学びを共有する時間を持つ予定でしたが、発表と質疑応答のみで授業時間が終わることも多く、毎回の総括はおこなえませんでした。しかし、発表とフィードバックの時間を十分に確保したことで、生徒は積極的に質疑応答に参加したりそこから教員も交えて話題が発展したりと、二〇二二年度までに比べて学ばはより深まったと考えられます。

まとめと展望

二〇二三年度からの新たな試みとして、複数教科の教員が授業に入り、生徒の学習をサポートしました。これにより、それぞれの教科の専門性を活かしたアドバイスが可能になりました。特にSDGsは経済分野や環境分野にかかわりが深く、生徒としては既習の部分もあれば、まだ授業では習っていない概念や用語もあり、その時には教員のサポートが効果を発揮したと考えます。また、中学三年生の担当が授業担当者として関わっていることで、生徒の事情をよく理解したうえで対応できたのもよかったです。

時間数が一時間から二時間に増えたことも、大きな変化でした。これによって、生徒たちは調査や作業により多くの時間を充てることができるようになりました。授業内に作業する時間を多く持てたことで、教員からのサポートもより充実しました。また、先にも述べた通り、発表に対するフィードバックの時間が充実したことで、調べただけに終わらない学びや気付きが生まれたと思います。

また、同じく二〇二三年度からの新たな取り組みである「データ」の単元によって、調べたデータの出典の信頼性や最新のものかなど、表やグラフなどの数値に対する意識

も高まっていました。今までもグラフを用いて説明をした発表はありましたが、二〇二三年度はより多くの生徒がグラフやマップチャートを読み解いたり作成したりして活用する姿勢を見せました。授業で実践を多くおこなった効果が出ているといえるでしょう。

一方で、次年度以降の課題もあります。生徒の様子を見て途中から二時間連続の授業に変更しましたが、授業が隔週になることで、生徒が取り組みへの継続した意識を持ちにくかったり、生徒の取り組みに対して教員がアドバイスするタイミングが減ったりするという課題が見つかりました。また、全クラスの授業回数が揃っていない場合や急な休校や変更などが起きた場合は、クラスで大きな差が生じることが予想できます。

また、担当者についても課題があります。複数の教員がいたことで、生徒が各自取り組む作業に手厚く指導ができました。しかし、複数教科に渡って教員が関わる授業となると、担当者を決めたり時間割を組んだりする作業が煩雑になります。今後も複数の教員が関わってこの授業を続けていくためには、持続可能な仕組みを考える必要があります。



国際学院

読書につなげる 国語（にほんご）の授業

初等部教諭

あがり
上里
くみ
久美

一条校として大切にしたい国語教育

同志社国際学院初等部では授業全体の約半分を英語で教えています。一学年に必ず1、2人の外国人が副担任のような形でついているため、子ども達は日常的にシャワーを浴びるように英語に親しむ環境にあります。しかし、本校は学校教育法第1条で定められた一条校です。英語教育に力を入れ、バイリンガル教育を教育の3本柱の一つとして進めている学校だからこそ、「にほんご」を教える教師は母語である日本語の力をそれ以上にしっかりと培う必要があると私は考えています。

文部科学省の文化庁文化部国語科は、「国語力を身に付けるための国語教育の在り方」の中で、「国語教育の中で、「自ら本に手を伸ばす子供」を育てることを考える必要がある。読書は、国語力を形成している「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」や「国語の知識」のいずれにもかかわり、これらの力を育てる上で中核となるものである。」と述べています。また、「学校における国語科教育

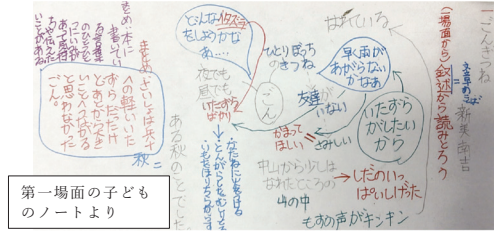
では、「情緒力」「論理的思考力」「思考そのものを支えていく語彙力」の育成を重視していくことが必要である。情緒力を身に付けるためには、小学校段階から「読む」ことを重視し、国語科の授業の中で、文学作品を中心とした「読む」ことの授業を意図的・継続的に組み立てていくことが大切である。」とも述べています。

同志社国際学院の国語の授業

さて、現在私は四年生の担任をしています。国際バカレアに基づく探究型の授業を行っているため、国語（本校では「にほんご」と言っている）として単独で確保されている授業数は四年生では週三時間であり、一般的な学校の週七時間とは四時間少なくなっています。（その四時間は探究の授業に組み込まれており、説明文などで学んだ力を活用していく教科横断型の授業として探究の時間の中で実施しています。）

ここでは、四年生の代表的な物語文『ごんぎつね』をどのように授業したのかについてご紹介させていただきます。

四年生の物語教材『ごんぎつね』



『ごんぎつね』は一九五六年に初めて国語教科書に登場して以来、七〇年以上も教科書に掲載され続けてきました。しかも、この四十五年余りは、すべての四年生の教科書に掲載されています。なぜ、『ごんぎつね』がこれほど長く教材としての命脈を保ってきたのかを鶴田清司氏はその文学的価値から、起承転結が明確なストーリー構成、異なる世界に生きるものたちの心のふれあいというテーマ性、最後の場面における視点の転換と感動的な結末、民話的な語り口と伝承性という4点を指摘しています。〔1〕

『ごんぎつね』の授業

この物語文の学習では、「読むこと」において、登場人物（ここではごん）の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり（六場面）と結び付けて具体的に想像できることが大切です。

まずは、物語を読み取る際に大切な、いつ・どこ・だれについて一場面から読み取り、その後、全六場面を構成されている物語の場面ごとに（四、五場面はまとめて考えま

した）一貫して叙述から読み取り、そこから考えられることについて一緒に考えていきました。

板書・ノートへのまとめ方、授業の方法については有元秀文氏が提案しているブッククラブの方法を師事し、キャラクターマップ（登場人物相関図）・シーケンスチャート（あらすじ）を作った後に、ブッククエストジョン（主発問）で話し合う形を取りました。〔2〕

例えば、自分がやってしまったいたずらを反省して兵十につぐないをするごんは、初め、ぬすんだいわしを兵十のうちの中へ投げ込みます。しかし、次からは入り口にくりを置いて帰ります。そして、さいこの場面の兵十に火縄じゅうでうたれた時にはうちの土間にかためて置いています。このつぐないの渡し方（置き方）の叙述に注目してみただけでも、そこからごんの気持ちが想像できます。しかも、くりや松たけをくれているのを兵十が「神様のしわざ」だと考えていることを知った後は、置く場所が入り口からうちの中となっています。そこに気がついた子ども達は、（自分が届けていることを兵十に知ってほしかったからではないかな。）と考えました。

また、兵十のごんの呼び方が「ぬすつとぎつねめ」「あのごんぎつねめ」から「ごん」「おまい」「おまえ」に変わっていったことから兵十のごんに対する気持ちを考えました。文章で使われているオノマトペや色に注目して考えてみたりもしました。（これは高学年での宮沢賢治作品の読解につながります。）

そしてシーケンスチャート（あらすじ）を考える中で、

一場面から五場面がすべて「〇〇するごん」だったのに、六場面だけが「〇〇する兵十」になりました。そこから子ども達が「なんだかおかしいな」と気づき、実は六場面だけ意図的に語り手の視点がごんから兵十になっていることがわかりました。なぜそうしたのか!? を考えていく中で、新美南吉が伝えたかったことをより深く考えることができたとように思います。

国語教育の中で、「自ら本に手を伸ばす子供」を育てることが大切であるため、この単元の最後は、他の新美南吉作品を読んで自力でキャラクターマップやシーケンスチャートを書く学びを入れ（『新美南吉童話集』世界文化社を全員に課題図書として渡しました、「ごんぎつね」で培った力を使って他の作品も深く読解しようということを目標にしました。最後に、学習を終えての子どもの感想をいくつかご紹介して私のご報告を終えたいと思います。

「最初は、悲しくてごんぎつねがかわいそうだなと思いました。でもじゅ業でしっかりオノマトペや色いろな力ギとなるものを見つけるうちに、作者はどんなことが表したかったのかがわかるようになりました。もっと読んでいくと、ごんぎつねのし点から急に兵十のし点に変わっているのも読みとれました。細かく本を読んだのが初めてだったので、一つの言葉で意外なことがわかったりするのにびっくりしました。

ごんぎつねが本当に反省していることがよくわかりました。ナレーターのことを語り手ということがわかりました。細かいところまでよみとるということがわかりました。いろいろなし点から見ると、本がもっと楽しくなることがわ

かりました。」

「ぼくは、ごんぎつねを読んで、最後はくりや松たけをとどけていたのがごんだと兵十に分かってもらえてよかったですと思います。何回読んでもむねがぎゅつといたくなります。なぜなら、もつとちがう方法でつくなつていたらなと思うからです。

イワシや栗をだましとってわたしてつぐなおうと思って、まさかいたずらもののごんがくれた物だとはだれも思いません。もしぼくが、兵十ならやっぱり神様のおかげだと思えます。なぜなら、ごんは、けつして悪いきつねではないと思えます。楽しいことをしたい。友達になりたい。と。思っただけです。兵十も優しい人なんだと思います。だから何度も何度もすなおにあやまれれば兵十もゆるしてくれたかもしれない。せめて、火縄じゅうでうつつ前にごんが栗をとどけてくれた事に気づいてくれたらなあと思います。

最近、「クマひ害」が社会問題になっています。山の動物達と人間はなかなか仲良くなれません。山の動物達が人をおそうのもきつと理由があるんだと思います。もつと気持ちをつ分かってあげられるようになったらいいなと思いました。」

「1」『文学の授業づくりハンドブック・授業実践史をふまえて』浜本純逸監修 渓水社

「2」『言語力を育てるブッククラブ・ディスカッションを通じた新たな指導法』

タフイー・コラファエルその他（著） 有元秀文訳 ミネルヴァ書房



吉川弘文館
2,640円(税込)
刊行日 2023年7月

人物叢書 中田 薫

北康宏 (大学文学部教授) 著

中田薫と聞いて、その学問業績や学界貢献について想起できる人は稀であろう。明治から昭和初期に活躍した法制史学の創始者、東京帝国大学法学部教授である。私がそんなマニアックな人物の伝記を書きたいと思った契機は、学生時代からその学問に心底魅せられていたからである。昭和初期に文学部にも出講し、当時学生だった古代史の坂本太郎や中世史の石母田正に決定的な影響を与え、今日に至る日唐律令比較研究、荘園制研究、封建制研究などの潮流を作った。従来への支配者目線の日本歴史を、歴史のなかで生き抜く無名の個人の営みから捉えなおした。江戸時代の民衆の結婚・離婚・借金などを描く『徳川時代の文学に見えたる私法』はその代表作である。日本民法を編纂した梅謙次郎から学んだ自由法観念のうえにドイツ歴史法学を応用した研究方法で、同期生の柳田國男の学問とは双子関係にある。中田がいなかったら、戦後の日本史研究の道程は全く異なった残念なものとなっていたらどう。

彼の堅実な研究生生活を基礎づけた学問愛は、学問への不当な弾圧との戦いとしても表出する。若くして日露戦争末期の戸水事件に参加し、澤柳事件・瀧川事件など大学の自治を脅かす政府介入では文部大臣に直談判するなど中心となって向き合い、親友の吉野作造とともに昭和初期の左翼学生運動や軍部右翼の大学干渉と戦った。他方、権威を嫌い、学士院恩賜賞や名誉教授をあっさり辞退、戦後最初の文化勲章に選ばれた際も断りかけたが、同期の松本系治や義兄吉田茂の説得で嫌々受けたという偏屈である。その人生のすべてが「学問」への献身であった。学術会議問題に象徴される学問への政治介入が問題となる今日、こういって「学問の自由」「大学の自治」の歴史を、本書を通じて多くの学生に知ってもらいたいと願っている。

著者より



サンエムカラー
1,650円(税込)
刊行日 2023年7月

安中市と同志社をつなぐ

本井康博 (元大学神学部教授) 著

同志社は昨年(二〇二三年)七月十七日に群馬県安中市と連携協力定を結んだ。本書は締結記念として当日、出版したものである。締結式は安中市で催され、式後に朝原宣治氏(オリンピック陸上競技メダリスト)と並んで、私が記念講演「安中と同志社の史的連鎖」を披露した。本書執筆の狙いは、協定締結に至った両者の史的交流を明示することにある。これまでの交流の主流が文化(教育・宗教)領域であったのは、起点の新島襄に由来する。神田で生育した新島は父親が安中出身ゆえに血縁的には上州系江戸っ子である。

一方、地元の安中では、新島が洗礼を授けた湯浅治郎(有田屋当主)が最大の功労者である。近親者や子どもたちを十人前後、同志社に送ったばかりか、新島の生前、社員(現理事)として同志社の経営に従事したうえ、新島死後は京都に転じて二十年間、財務を無給で担当した。

安中教会設立、新島記念会堂の建設、柏木義円を始めとする同志社からの歴代牧師招聘にも尽力した。湯浅家は戦後には安中へ新島学園を創設し、湯浅八郎(治郎の五男)を同志社総長のまま理事長・校長に迎えた(詳細は拙著「新島学園ものがたり」参照)。

ちなみに湯浅家縁の総長は、八郎を含めて四人に及ぶ。かつて京都と安中をつなぐ中山道が物と人の流れで賑わった以上に、協定締結を契機にさらなる諸種の領域で交流が活性化され、シン・中山道が構築されることを願う。

著者より

※著者の所属・職名は執筆時のものです。



フィルムアート社
3,080円(税込)
刊行日 2023年4月

クイア・シネマ
かんねこのゆうか
菅野優香 (大塚アキラハル・
スティーブ・ライオン研究科教授) 著

19世紀末に誕生したその瞬間から今日にいたるまで、映画は、家族や子ども、恋愛などを描きつつ、ジェンダーとセクシュアリティのテクノロジーとして発展してきました。こうしたテクノロジーであり装置として存在し続けてきた映画を、ジェンダーやセクシュアリティの規範性を批判的に問い直す「クイア」の視点から考えたのが本書です。もともと「奇妙な」「いっふう変わった」という意味であったクイアという語は、後に(主に男性)同性愛者を指す侮蔑語として使われますが、それが大きな変化を遂げるのが、1990年前後です。当時、エイズ・アクティヴィズムと学術研究を通して再定義された「クイア」は、規範性を問う視座として広がっていききましたが、映画もそのひとつでした。クイア理論は、それまでの映画のあり方を批判的に見る方法を教えると同時に、映画にはまだまだ探求されていない大きな可能性の領域があることを示してきたといえます。

『クイア・シネマ』は、過去10年間に雑誌や共著書などに書いてきた文章を大幅に加除修正し、書き下ろしの3本を加えて一冊の本にしたものです。映画作家と作品、スターと観客といった、映画研究ではおなじみの分析対象だけでなく、映画祭や映画運動、LGBTQをめぐるアイデンティティやコミュニティの形成についても論じています。本書を入り口として、クイア・シネマの豊かな批評生や実験性の一端に触れていただけることを願っています。

著者より



ナカニシヤ出版
2,640円(税込)
刊行日 2023年5月

昭和歌謡と文学の季節
いぬくぼ つよし
井口貢 (大学政策学部教授) 著

歌謡曲に限ったことではないが、昭和レトロブームである。ただ私がこんな本を書いてみたいと思ったのは、ブームに迎合したわけでは決していない。およそ30年前に、岐阜市の大学に勤務していたころ、地元放送局からの依頼で「いぐちみつぐのランプリング・ミュージック」という冠番組を持たせていただいたことが、実は動機の遠因となっている。その概略を言えば、私が偏愛するフォークソングやJ・ポップを一曲紹介し、それを手掛かりに地域社会や世相を語るという構成であった。わずか20分弱の番組であったが、すべてプロデュースも私に任された。

その初回にかけた曲が、高石ともやとザ・ナターシャペンンの「街」であった。本書ではこの曲のことを「永いあとがき」のなかの「地名の出ない京都ソング」という項で取り上げている。1975年(昭和50)に京都市民まつりのテーマソングとしても歌われたこの曲に、当時大学生だった私は得もいえぬ新鮮な魅力に惹かれた。有体のご当地ソングは、時として固有名詞で胡麻化すことで羊頭狗肉となる。しかし、高石によるこの歌詞は、普通名詞しか出てこない。詞が詩となつてその行間を駆けて昇華し、曲が編曲によつて変容する。そして一人の歌手の唄が唱となって、そして歌い継がれていく。その化学反応がスタンダードトナバーをつくる。それは必ずしも、一夜限りの時代の寵児になる必要はない。大衆文化の存在形態のひとつである歌謡曲が、そのとき人文知の一端を想起させて時代を超える。そんな想いの中で紡いだのがこの拙著である。

著者より



清文堂出版
12,100円(税込)
刊行日 2023年6月

△日常▽のなかの近世
—ある小さきものの物語—

にしおか ひろし
西岡直樹 (大学文学部名誉教授) 著

一七世紀後半の紀州・和歌山城下に、一人の男が生きていました。紀州藩家老三浦為時・為隆に仕えた家臣で、名前は石橋辰章(一六四二〜一七〇一)、主君為時から下された名は「生菴」。

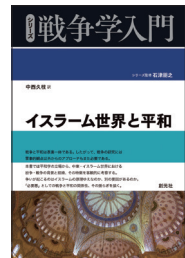
彼は「生」「大事件」というものに出会うことなく、「平穩」に「近世」という時間を生き、還暦の前年にこの世を去りました。「歴史学」の上では、「名もない」一人の男です。本書は、この男が遺した十七冊の日記から、彼の「日常」をみつめた、六つの論文と一つのノートから成っています。

私が歴史学の中でこだわりつづけてきたのは、「人が日々を生きる」とはどういうことなのかという問いです。しかし、戦後歴史学は、長い間、「一人一人の日常」などは「意味のないこと」として扱うことをしませんでした。けれども、私たちは、「日々」を生きています。それはほんとに、それほど「意味のないこと」なのでしょうか？

たとえ「大所高所」に立つ歴史家から「身辺雑事の歴史」と擲筆されても、その一人の「幸福」をみつめ、その意味を問いたい。そして、彼が求めたはずの「幸福」の姿から「近世の「日常」」さらに「近世社会」というものを照らしかえたい。

これが、本書がめざした課題です。ほんとうに「ささやかな試み」ですが、もしよろしければ、この「小さきものの物語」にお付き合いください。

著者より



創元社
2,640円(税込)
刊行日 2023年6月

イスラーム世界と平和

なかじ ひさえ
中西久枝 (大学院グローバル・研究科教授) 著

本書は、パレスチナ問題、シリア内戦やイエメン内戦、アフガニスタンでのタリバン政権復活など中東イスラーム世界での紛争や戦争、さらにはイスラームとジェンダー平等の問題や中東の民主化と経済発展など、当該地域で起こっているダイナミックな動きを読み解くための一助となることを目指している。戦争学シリーズの一冊として出版するお話をいただいた当初は、日本に馴染みのない戦争学という言葉に違和感を覚えた。でも戦争と平和は表裏一体であることは中東でのフィールドワークを通じて痛感してきた。欧米や日本のメディアでテロリストと命名しがちであるタリバンやハマスに与する人びとが、ふつうに家庭や社会生活を営み、貧困や生活難にあえぐ人びとに対して福祉活動を行っていることを現地で知った。また、昼間は畑を耕し、夜は特殊部隊の戦闘員となって生活の糧を得ている話を聞く機会もあった。中東イスラーム世界の人びととの触れ合いによって、テロリストと普通の人の境界線はどう引けばよいのか、という問いを長年温めてきたが、それを本の一部で紹介できてよかったと思う。本書は、2022年2月中旬から半年間大学からいただいた在外研究期間に執筆したものである。ロンドンのホスト大学に到着して6日後に始まったウクライナ戦争の衝撃を戦争学のメッカと言われるイギリスで感じ取りながら、情報戦や心理戦といった非常常戦が軍事支援を正当化している現実にも疑問を感じながら執筆したのを今も覚えている。日ごとに混沌としていく世界のなかで、将来を切り開いていく若い人たちにぜひ読んでいただきたい。

著者より



NHK出版
1,023円(税込)
刊行日 2023年7月

Z世代のアメリカ

三牧 聖子 (ミツカキ セイ子)
NHK出版 編集局長
著

アメリカのZ世代(1990年代半ば〜2010年代序盤生まれ)は、「例外主義」を放棄した世代ともいわれています。アメリカは、世界でも豊かで、民主主義を成功させた例外国家と自負してきました。しかし、Z世代はこうした「例外主義」を共有していません。彼らが見てきた過去20年間のアメリカは「テロとの戦い」を遂行し、日本円で880兆円を費やし、世界で40万人を超える市民を犠牲にしました。戦争に多額のお金を使う一方で、国民の社会保障の充実を怠ったために、コロナ危機では先進国では異例の感染死者数を出しました。

本書では、Z世代の支持を集めてきた民主党のバーニー・サンダース議員を大きく取り上げています。サンダースが掲げてきた国民皆保険や奨学金ローンの免除は、「社会主義的」、さらには「極左的」と批判されてきましたが、セーフティネットの拡大や格差の是正は、あらゆる人間の命が守られる社会を実現する上で不可欠の政策です。そのような主張が極左扱いされ、格差が放置されてきた今までのアメリカ政治こそが異常だったとみるべきではないでしょうか。Z世代のサンダース支持の背景には、公正な社会への彼らの強い希求があります。

現在、中東のガザで起こった戦争を背景に、改めてZ世代に注目が集まっています。イスラエル支持が強いアメリカにあって、Z世代のパレスチナ支持は他世代に比べて突出しており、ここにも正義や公正さを重視するZ世代の価値観があらわれています。今後のアメリカ、そして世界平和の行方に関心を持つ方に、ぜひ手に取っていただきたいです。

著者より



英宝社
3,080円(税込)
刊行日 2023年6月

イギリス湖水地方におけるアーツ・アンド・クラフツ運動

白井 雅美 (ウツ井 雅美)
大文字文学部教授
著

風光明媚なイギリス湖水地方にアーツ・アンド・クラフツ運動の軌跡が残されていることはあまり知られていない。この十九世紀に興った工芸美術運動は、湖水地方の重要な文化遺産なのである。

産業革命により機械化が加速して粗悪な工芸品が大量生産されたことへの反動として興ったアーツ・アンド・クラフツ運動は世界に広まり、英国内においては工芸美術を学ぶ学校が産業都市に次々と創設され、教育を受ける機会が無かった労働者階級の若者や中流階級の女性たちの学び舎となった。湖水地方にも、この地に移り住んだジョン・ラスキンの影響下で、ギルド、学校、訓練所が設立され、多くの工芸美術作家、建築家、作家、景観設計家、そして起業家が輩出された。

湖水地方の特徴は、工芸、建築および造園に必要な鉄鉱石、スレート、銅、黒鉛、花崗岩、木材などの自然資源の豊かさにある。さらに、産業革命で成功した中流階級の人々が移り住んだり余暇を過ごすため、この地に屋敷を建てたり、改装したりして競い合った。同時に自然を借景とした造園も盛んになる。そして、博愛主義運動に携わった中流階級の文化人や実業家たちは、湖水地方で貧困にあえぐ農民たちのために工芸技術を学ぶ場を作り、その工芸品を商品化した。彼らの経済的自立を促した。また、家具工房やラスキンレース工房が興り、新たな世界が構築された。このように、湖水地方は独自のアーツ・アンド・クラフツ運動の舞台となった。本書では、その軌跡をぜひいただきたいと思う。

著者より



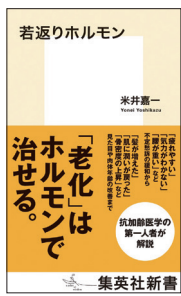
幻冬舎
1,034円(税込)
刊行日 2023年7月

**断断を乗り越えるための
イスラム入門**

内藤 正典 (ないうち まさのり)
(大学講師・ロバート・カレッジ・イェルサレム)
著

世界でイスラム教徒との衝突が起きるたびに暗澹たる想いがする。本書を上梓して数か月後、ガザでイスラム勢力のハマスがイスラエルを攻撃して、イスラエルが猛反撃を開始し、ガザの住民に途方もない惨禍をもたらした。テロや戦争が起きて、一方の主役がイスラム組織である場合、イスラムという宗教そのものに暴力性があるから共存できないという人が確実に増えている。だが、考えてほしい。イスラム教徒は、世界におよそ20億人。世界の人口の4人に1人と反目し、戦うことなど不可能なのである。ならば相手を知り、無用な対立を避けなければいけない。イスラムというのとはとも商人の宗教であり、交易を通じてあつという間に世界に広がった。そして、この宗教は禁欲を無理強いせず、人生を「生きやすい」ものにする知恵であふれている。欧米諸国ではこういうことを知ろうとしない。他方、守るべき対象とする女性や子どもが殺された時には、イスラム教徒の激怒を抑えることはできない。暴力の芽はそこにある。2012年、同志社大学では、アフガニスタンから、政府とタリバン、双方の代表を呼んで平和構築会議を開いた。それから十年、米軍は撤退し、タリバンは再び政権の座にいた。女子教育など問題が山積する政権だが、それでも同志社に来たことで、自分たちの目は世界に開かれたと、今でも話しているそうである。

著者より



集英社新書
1,056円(税込)
刊行日 2023年8月

若返りホルモン

米井 嘉一 (よない よしひこ)
(大学生産科医学部教授)
著

私がアンチエイジングの言葉を知ったのは、1999年です。2000年に日本抗加齢医学会の前身である抗加齢医学研究会を立ち上げ、神奈川県川崎市の日本鋼管病院でアンチエイジングドックを始めました。私自身がデヒドロエピアンドロステロン(DHEA)とメラトニンが不足していることがわかり、それ以来、継続して服用しています。私は、新しい療法が登場した時は、自分自身で試してみようという主義です。問題なければ、次に家族に使います。アンチエイジングドックで診断し、必要に応じて処方してきました。そして四半世紀が経過、これらのホルモンをまとめた本を出す夢を追い続け、研究のために大学教員となり、多くの方々の協力を得て、ようやく出版にこぎつけました。これらのホルモンについて学ぶことは大変重要です。健康寿命の延伸、公的医療費の削減のために是非とも活用して欲しいです。大切なことを勉強しない医療従事者や研究者は不作為だと思えます。嬉しむことに不作為を恥じる医師は増えつつあります。2020年3月、メラトニンが小児期の発達障害に伴う入眠障害に医薬品として保険適応になりました。認可には臨床データの蓄積が必須ですが、これは「医師主導による臨床試験」によって成し遂げられたのです。それまでは、海外から薬監証明手続きを経て輸入するか、実験用試薬を服用していました。メラトニンを必要とする多くの子供たちと親にとって福音となりました。さあ、次はDHEAの番です。

著者より



彩流社
4,400円(税込)
刊行日 2023年8月

ロバール・ルパージュと
ケベック
神崎舞 (大学プロパル
地域文化学部准教授) 著

ロバール・ルパージュは、カナダを代表する演出家であり、劇作家、そして俳優である。「映像の魔術師」との異名を持つほど、映像の使用に長けており、視覚に訴える舞台の演出は、国境を越えて多くの観客を魅了してきた。演劇だけでなく、バレエ・ダンスのシルヴィ・ギエムと共同制作した作品に加え、サーカス集団シルク・ドゥ・ソレイユやメトロポリタン・オペラなど、演劇というジャンルを越えた作品の演出を手掛けてきたこともまた、ルパージュの多才さを物語っている。日本や中国の文化を取り入れた作品も発表しており、これまでに日本でもしばしば上演されてきた。

本書は、日本語で記されたものとしては初めてとなるルパージュ作品に関する研究書である。彼の作品の中でも、カナダの文脈を重ねた『ロミオとジュリエット』や、戦後の広島から着想を得た『太田川七つの流れ』、さらに一人芝居の『アンデルセン・プロジェクト』や『8087』などを分析対象としている。すべての作品を網羅しているわけではないものの、年代ごとの傾向の一端を掴めることに加え、国際的に活躍するルパージュの舞台表象と、生まれ育ったフランス語圏ケベック州との関連を見出すことができる。先行研究はもちらんのこと、一般公開されていない資料や、ルパージュ本人及び制作者とのインタビューなども参考にする事で、新たな視点を加えることを目指した。ルパージュとの3回にわたるインタビューの翻訳も本書に含まれている。

著者より



東京大学出版会
5,720円(税込)
刊行日 2023年9月

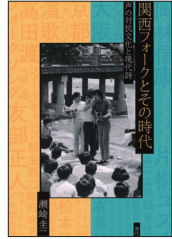
バルカンの政治
月村太郎 (大学政策学部教授) 著

本書は、バルカン地域について、19世紀から現在までの政治的な動きをたどったものである。アガサ・クリステイーの『オリエント急行殺人事件』では、最初の事件がユーゴスラヴィア領内を走る車中で起こる。乗客は、事件が生じた場所がバルカン地域であることに危機感を募らせる。実際の歴史においても、冷戦時代終了直後に発生したユーゴ内戦などにより、バルカン地域は西欧的な「文明」から遠く離れた場所とされてきた。

本書では、バルカン地域の近現代政治史を、イギリスの歴史家エリック・ホブズボームに従って、「長い19世紀」「短い20世紀」、その後の時代に区分して紹介している。長らくオスマン帝国の統治下にあったバルカン地域では、西方から金銭経済とナショナリズムが波及し、「長い19世紀」の間に独立が次々に達成された。バルカン諸国は、「短い20世紀」の間に、程度の差こそあれ、いずれも非民主的な政治を経験してきた。

EUやNATOの東方拡大の波が押し寄せ、「民主化」が進む現在のバルカン諸国は、鳥瞰的には、いずれも等しく「西欧化」の過程を歩んでいるかのように見える。しかし、当たり前のことながら、国境を超えれば、異なる政治が展開されている。バルカン地域と一括りにせずに、小国の政治を少し丁寧に追いつつ、ネットの映像や画像の助けも得ながら、彼の地で何が起きてきたか、起きているかについて思いを馳せることも、なかなか楽しい知的作業である。本書がそのガイドブックになれば幸いである。

著者より



青弓社
3,080円(税込)
刊行日 2023年10月

関西フオークとその時代
声の対抗文化と現代詩

瀬崎圭一 (大学文学部教授) 著

同じ文学部の同僚と戦後若者文化についての勉強会を行い始めたことが本書執筆の出発点となった。日本において大きな若者文化となったフオーク・ソングと現代詩が接点を持っていたこと、そして、その関係性が特に関西において強かったことから、このテーマは関西の大学で日本近現代文学を教える私のものとなった。

そのような学問的関心の一環として本書を執筆してはいるのだが、その背景には自分の個人的な経験がある。一〇代どころ、古今東西の詩を読み漁り、同時に一九六〇年代の米英のロックやフオークに関心を持っていたことである。本書を執筆するまでもとにも聴いたことのなかった関西フオークは、それ故にすんなりと自分の中に入ってきた。そしてフオークが民衆の歌であるのと同じように、一般の方にも読んでもらえるような書き方に努めた。

この本の主人公は、詩人であり京都精華大学名誉教授であった故片桐ユズル氏である。本書を読み進めていくと、片桐氏が、詩壇の中に自閉して難解になってしまった現代詩を、若者たちと共にフオークを通じて再生しようとした運動の軌跡がまず明らかになるだろう。さらに、その運動を担った人物や場に、同志社の関係者やその周辺が大きく関わっていたことも見えてくるだろう。そのような意味で、本書は同志社の現代史の一側面を写し取っている。

片桐氏が亡くなられたのは本書刊行直前のことだった。本書を通じて、関西フオークを支えた片桐氏のことを少しでも知っていただければ幸いです。

著者より



武威野書院選書
2,200円(税込)
刊行日 2023年10月

定本新島八重伝
個儼不羈の女

吉海直人 (女子大学特任教授) 著

今からちょうど十年前前、NHKの大河ドラマで「八重の桜」が放映された。その折、大河本として『新島八重 愛と闘いの生涯』(角川選書)を出させていただいた。たまたま新島八重の稀少な懐古談が手元にあったことで、他に先駆けて本をまとめることができたからである。従来知られていなかった板カルタのこと、大島正満との交流、八重の和歌の収集など、それなりの成果もあったが、なにしろ資料不足によっておおよそ伝記とは程遠いものになってしまった。

幸い大河ドラマの影響で、その後多くの八重関係資料が発掘・報告されたので、そういった新出資料を逐一拾い上げていった。こうしてちょうど十年経過したところで、もっとも多くの資料を用いた、できるだけ詳しい伝記として出版した次第である。今回の本の特徴は、できるだけ見出しを多く付け、短いまとまりでつなぎ合わせていることである。

また八重周辺の人物にも広く目を向けている。夫の新島襄はもちろんのこと、兄の寛馬や前夫の川崎尚之助にもかなりスペースを割いている。大河の折は「ハンサムウーマン」という言葉が話題になったが、今回は八重のことを「個儼不羈の女」として紹介してみた。「個儼不羈」は新島襄の好きな言葉であるが、それをあえて教えずにはなく妻の八重に当てはめてみた。決定的外れだとは思わないが、いかがであらうか。

これを機に、あらためて新島八重について知っていただければ幸いです。

著者より

ラットランド・アピールをもう一度読んでみる —同志社の原点を考える—

同志社社史資料センター

はじめに

今から150年前の1874年10月9日、アメリカ合衆国のヴァーモント州ラットランドにあるグレイス教会で、アメリカン・ボードの第65回年次大会が最終日を迎えていました。この日、新島襄は日本に向かう宣教師としてあいたつのため登壇し、その壇上で聴衆に向かって宿志を吐露し、5,000ドルの寄付の約束を得たと言われています。この寄付の約束が、翌年に開校した同志社英学校開校の原資となりました。

この時に新島が話した内容に関しては、それを語る人によって内容が少しずつ異なりました。学校の設立を訴えたという人もいれば、大学の設立を訴えたという人もいます。あるいは、日本の教育の重要性を訴えたという人もいます。新島が実際に話した言葉を現代人の私たちが正確にト

レースすることは困難ですが、現地の新聞や新島自身が書き残した草稿や文章の中に、ラットランドの話が挿入話としてしばしば登場します。本稿では、ラットランド・アピールから150年となる今だからこそ、同志社が創設される発端となった新島のアピールを振り返り、同志社の原点を考えるきっかけを提供したいと考えています。

現地新聞が報じた新島のアピール

新島のアピールを記していることでよく知られた資料の1つに、ラットランド・ウィークリーという地元の新聞があります。この新聞には、新聞記者が聞き取り、理解した新島の言葉が書かれています。学校設立に関する内容は次の通りです。

The church in Kobe has no educational institution

(以下波線、筆者付記) , but she must have something of the kind. It is repulsive to the Japanese mind to beg, but I fear we must beg for that, for Christ says, ask and ye shall receive. Therefore I ask you to give help enough to start this training institution, to raise up teachers and preachers to help some 33,000,000 people.

The Rutland Weekly Herald, October 15, 1874 からの引用



伊谷賢造「寄付を訴える新島」1965年

神戸の教会には教育施設がないため、教師や伝道者を育てる施設を始めたいという趣旨で発言が受け取られています。この記事からは学校の目的はわかりますが、学校の種類まではわかりません。執筆した記者が、新島が日本で設置したいと考えていたものが何か、はっきりと認識していなかったように考えられます。いずれにせよ、この時の新島の演説が、年次大会に集まった人々の心を打ち、5,000ドルに及ぶ寄付の約束が集まったことは事実かと思えます。

また、同志社英学校開校時から5年ほどの間、新島が使用していた帳簿（新島遺品庫資料 上0247「同志社出納簿」の最初の収支には、1月1日と日時が付され「On hand from American Friends 5,000.00」とあります。こうした事実からラットランド・アピールの成果は同志社英学校開校の基礎になり、運営に大きく貢献したことが窺われます。同時に、このアピールは同志社最初の募金活動

"Doshisha"
Received (1875) Paid

	Received	Paid	Emp	Sum
Jan 1 st	On hand from American friends. 5,000.00	1 bank school land	550	00
		out. Davis salary	100	00
		Nov. " "	100	00
		" " rent	10	00

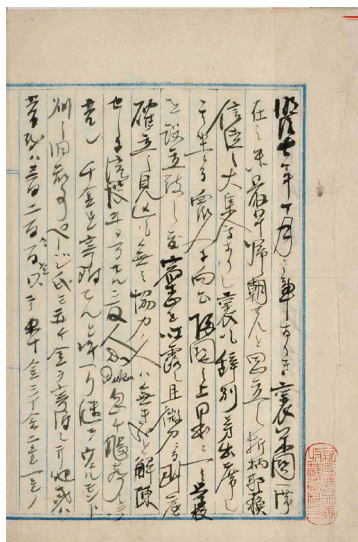
「同志社出納簿」(部分) 1875年

であり、新島の成功体験となりました。

学校の設立か、大学の設立か

以降、新島はラットランド・アピールにまつわるエピソードを様々な場所で披露しています。最も古い記録の1つに、英学校開校から3年目の1878年4月27日付でまとめられた、外務卿寺島宗則に宛てて書いたとされる弁明書の草稿（新島遺品庫資料 上0077「同志社経営に關して政府への弁明」1878年4月27日付）があります。この草稿を読むと、同志社に対して、外国資本に頼るばかりに、その出資者の傀儡になっているのではと、政府から疑義が呈されたことが見えてきます。この草稿中でラットランド・アピールが冒頭で使用されました。そのうち、学校に關する記述は次の通りです。

明治七年十月之事なりき、襄米國へ滞在之末最早帰朝せんと思立し折柄耶蘇信徒之大集会ありし、襄も辞別旁出席し其坐二而衆人に向ひ、帰國之上日本ニ一之学校を設立致し度宿志を吐露し、且微力ニ而到底確立之見込も無之協力ノ人ハ無き哉と開陳せしに（後略）

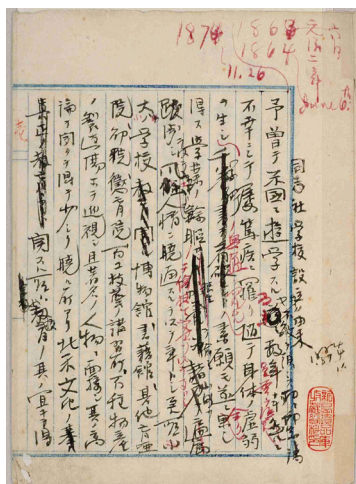


弁明書草稿1878年4月27日付

『新島襄全集』第1巻9頁

米国からの寄付は、受け取った以上は同志社の所有にするものであり、寄付者の意志は介在しないことを、新島はこの草稿に明記しています。そして、その寄付の成り立ちを説明する際にラットランド・アピールのエピソードを利用しています。この時の表記は「学校」でした。また文字通りの意味というよりも、学校としての同志社英学校、そして、その英学校を設立し運営している結社同志社を指しているようにも受け取れます。

ところが、ある時点を境に表現が統一されていきます。1882年11月に新島がまとめた草稿に「同志社学校設立



草稿「同志社学校設立ノ由来」1882年11月

ノ由来」という手書きの資料があります。同志社設立に至る経緯をまとめた資料で、海外で広めた見聞から教育の重要性に気が付いたことや岩倉使節団随行の経験、ラットランド・アピールの内容とその時に起きたエピソード（2ドールを寄付した農夫と寡婦などをまとめています。そのうち、アピールに使用した学校に該当する箇所は次の通りです。

（前略）予ノ朋友過半其ノ会ニ趣ケルヲ以テ、予ヲ勸メ其会ニ臨マシメ予ヲシテ契〔訣〕別ノ詞ヲ述シム、予敢テ之ヲ辞セス、遂ニ壇上ニ昇リ数千ノ聴衆ニ向ヒ予ノ平素ノ願望ヲ吐露シ、真正ノ教育ニヨラサレハ真正ノ文化ハ期シ難ク、我同胞三千万ヨノ幸福ハ一ニ教育ノ其ノ宜ヲ得ルニ

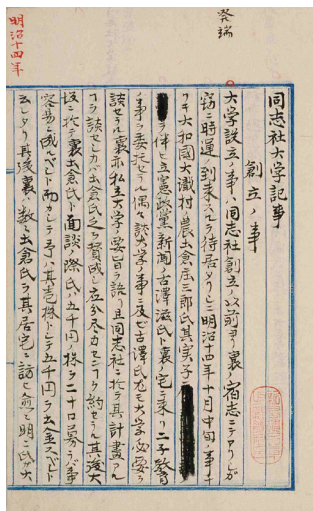
係ルヘケレハ、方今本邦維新変更ノ際苟モ本邦ヲ愛スルノ士人ニシテ豈傍觀坐視スベケン、予帰朝ノ後必ラス一ノ大ヲ設立シ以本邦ニ竭ス所アラントス（後略）

『新島襄全集』第1巻33―34頁

新島はこの草稿を作成する際に、それまで書き残していなかった事柄をいくつか盛り込みました。そのうち、ラットランド・アピールとの関係で、新島は岩倉使節団随行の際に欧米諸国を訪問する中で教育と文化の進歩に関連性を見出し、「何ツカ帰朝セハ一ノ私立大学ヲ設立シ、我邦家ニ竭サンコトヲ望ミ」と記しています。新島は西欧文明と教育との関係、この関係に寄与する大学の存在意義を確信したことを大学設立の動機としています。この言葉通り解釈すれば、ラットランド・アピールを実施する前に、新島は大学設立を期していたと考えることもできます。

大学設立運動を本格化させたきっかけの1つ

残された新島の資料を見る限り、1882年11月以降、「学校」としていた表現が「大学」に変わります。その理由の1つが、草稿作成の9ヶ月前の出来事が関係している



「同志社大学記事」年不詳

ように考えられます。新島の日記『日抄』には、1882年1月12日の項目に、「此夜、土倉氏、法学ノ為予二五千円ヲ投スル事約セリ」とあります。土倉氏とは、土倉庄三郎を指します。土倉は吉野の山林で財を成した人物で、自らの子弟を同志社に学ばせた人物です。その土倉が法学のために5,000円を投じる約束をしたとあります。もう少し具体的な記録が『同志社大学記事』（新島遺品庫資料上0032「同志社大学記事」年不詳）にあります。最初のページに「創立ノ事」、上部に「発端」と記され、大学設立を考えるに至る文章が続きます。そこには1881年10月中旬に土倉と古澤滋が新島の自宅を訪れた際に、「偶々談大学ノ事ニ及ビ古沢氏尤モ大学ノ必要ヲ談セラル、襄亦私立大学ノ要旨ヲ語り且同志社ニ於テ其計画アル事ヲ

談セシカバ土倉氏之ヲ賛成シ応分尽力セン事ヲ約セラル」とあります。この後に新島は土倉と大阪で会ったようで、「五千円ノ株ヲ二十口募ラバ事容易ニ成ルベシト、而カシテ予ハ其一株トシテ五千円ヲ出金スベシ」と記し、5,000円という金額の根拠がわかります。これらの記録は、新島の自筆ではありませんが、新島の行動を記録させたものです。その後、1882年1月に新島が土倉から寄付を約束されたということになります。ここから、新島の大学設立運動が始まったと考えられます。

同志社大学設立運動で使用されたアピール

以降、新島は大学設立運動、言い換えれば大学設立の賛同者を求め、寄付を集める運動を展開していきます。その際に同志社を紹介する文章として作成された冊子の1つに「同志社設立の始末」（新島遺品庫資料上0004「同志社設立の始末」1883年4月）があります。

この冊子は、大学設立運動開始直後の1883年4月に刊行されています。その内容は、新島の密出国から山本寛馬との同志社結社までです。そして、この冊子では、これまで概要しか述べていなかったラットランド・アピールの

内容が詳しく記されました。該当箇所は次の通りです。

凡そ何れの国を問はず苟も真正の文化を興隆せんと欲せば須らく人智を開発せざるべからず、社会の安寧を保全せんと欲せば必ず真正の教育に依らざるべからず、方今我邦日本に於ては現に戊辰の変乱を経て旧来の陋習を破り、封建の迷夢を醒して明治の新政を行ふの際、社会の秩序破れ紀綱紊れ人心帰着する所を知らず、今日に於て我日本に真正の教育を布き、以て治国の大本を樹立し以て人智を開発し、以て真正の文化を興隆せんと欲せば宜しく欧米文化の大本たる教育に力を用ひざる可らず、回顧すれば今を去る十一年前、襄の郷国にありしや当時の国勢日々に危きに瀕するを觀て憂憤の心に堪へず、慨然五大洲歴遊の念を發し、一片訣別の辞もなく父母弟妹郷友に別れ衣食住の計もなく、幕府の大禁を犯して一身の窮困を顧みず愈々蹶て愈々奮ひ生命を天運に任せて成業を万一に期し、孤行単立長風万里の波濤を越へ遂に貴国（アメリカ、執筆者註）に渡米せしも亦、只真正の開明文化と真正の自由幸福とを我日本国に來さんことを祈るの丹心に外ならず、顧ふに我邦同胞三千余万将来の安危禍福は独り政治の改良に存せず、独り物質的文明の進歩に存せず、一に教化の烈徳其力を効し教育の

方針其宜を得ると否とに係はること昭々乎として復た疑ふべきに非ず、今や襄貴国紳士諸友と袖を分て恙なく我国に帰るを得ば必ず一の大学を設立し、之が光明を俵りて我國運の進路を照し、他日日本文化の為に聊か涓埃の報を効す所あらんとす、嗟呼満場の聴衆諸君よ襄の赤心寔に是の如し、誰か襄が心情を洞察し幸ひに斯の一片の素志を翼賛する者ぞ

『新島襄全集』第1巻 73—74頁

新島が主語となつて作成された文章であり、冊子の責任者として新島の名前があり、文章が新島を主語としていることから、この冊子の内容は新島が監修したと考えられます。最初に紹介したラットランド・ウィークリーの内容とはずいぶんと異なり、具体的な叙述が増していますが、およそ9年前のアピールの内容をまとめていることを考慮すれば、内容に相違があることは、ある意味で当然かと思えます。あるいは、事前準備なく実施したアピールの内容が、帰国後にことあるごとに披露することで、論理的にまとまつていったのかもしれませんが。

このアピールには続けて、約5,000ドルの寄付の約束を取り付け、2ドルを寄付した農夫と寡婦のエピソード



同志社が準備していた大学用地（大学所有地）
「同志社所有地明細図」（部分）1890年

必ず一の私立大学を設立し、以て我が国家の為に微力を竭さんことを誓ひたりき」、そして、ラットランド・アピールの際には「誓つて此の事業に向つて微力を尽さんことを欲す」と表現していま

にも言及しています。大学設立運動開始当初から、新島はアピールに続く一連の出来事を同志社のルーツの説明として活用していたようです。

おわりに

同志社大学設立運動において、以降もラットランド・アピールは使用され、「大学」という言葉が使用されます。同志社関係者にはよく知られた資料「同志社大学設立の旨意」では、「大学」という言葉は使用されていませんが、岩倉使節団と欧米を歴訪したことで「他日我邦に帰らば、

す（『新島襄全集』第1巻、131頁）ここにある「事業」が大学設立運動であることはタイトルからも文脈からも明らかです。

新島がラットランド・アピールで述べた言葉が、「学校」か、「大学」かを正確に把握することは難しく、また、新島自身の言葉の使い方も一定ではないことは資料が示す通りです。しかし、ラットランド・アピールの内容が、密出国の動機や岩倉使節団での体験と結びつき、次第に洗練されていく様を資料で追っていくと、かつて考えていたこと、言葉にできなかったことが後に付け加えられているようにも見えます。それほど新島在世中の同志社は、将来像を描くことができるほど財政的にも、教学的にも、学生数の点においても大きく発展していました。今回紹介したラットランド・アピールを順序だててその成り立ちや内容を理解することは、新島が目指した同志社大学の本質を理解する一助となるのではないのでしょうか。

※掲載資料はすべて同志社社史資料センター所蔵

同志社創立150周年記念イベントのご紹介

法人部

法人事務部 創立150周年記念事業事務局

Doshisha New Day 開催

Doshisha New Dayとは、「同志社の未来をつくるための特別な1日」のことである。今年で3回目となり、創立記念日の11/29に同志社大学ハーディーホールで開催した。遠方の方のためにオンライン配信も行い、合わせて約

160人の参加があった。

今回の中心は、同志社大学出身の2人のアスリート、北京オリンピック陸上男子4×100mリレー銀メダリストの朝原宣治さん（1995年同志社大学商学部卒業）と陸上1,000,000mの日本記録を持つ田中希実さん（2022年同志社大

学スポーツ健康科学部卒業）による対談であった。登場前には、同志社大学応援団が演舞を披露し、会場の雰囲気は大いに盛り上がった。

対談のテーマは「世界に挑む」で、世界の強豪選手と競い合ってこられたお二人から貴重なお話を聞くことができた。陸上競技について、精神面やメンタル面の視点、トレーニングの取り組み方、また父をコーチに持たれる田中希実さんの親子の関係性にも話題が広がり、とても興味深い内容であった。また学生からのインタビューでは、学生時代のエピソードを伺うことができ、お二人とも「自由」という共通のキーワードについて話され、同志社の卒業生らしい一面を感じた。

次に、今年度を実施した同志社創立150周年記念事業について同志社未来創造プロジェクトメンバーから、「同志社ウエディング」「全同志社人がつなぐ150km」「お菓子作り教室」「オリジナル賛美歌『王の道を行こう』」の4





件の紹介があった。

その後は、2024年度に予定している事業の中からアメリカカグレイス教会における記念礼拝と全同志社合唱祭の紹介（2024年11月9日、京都コンサートホール）があった。合唱祭参加団体であるCCDアルママータと同志社グリーククラブのOBによる歌の披露もあった。アメリカカグレイス教会における記念礼拝（2024年10月10日（木）～15日（火）4泊6日）についてはこの後に記載している。また、新島襄に関するアニメーション制作についての説明もあり、制作のための寄付のお願いがされた。

最後に、同志社大學應援團と合唱団のカレッジソングにより、今年のDoshisha New Dayが幕を閉じた。

当日の様子は「同志社創立150周年事業公式

YouTube」からご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/@doshishasourisu150>

同志社創立150周年記念トークショー開催

11月29日（水）、同志社礼拝堂にて、「卒業後の可能性は無限大！ーわたしたちが理系からマスコミへ進んだ理由ー」と題した同志社創立150周年記念トークショーを開催した。

八田英二同志社総長・理事長挨拶の後、大学ハリス理化学研究所柗太一助教、日本テレビ放送網株式会社アナウンサー山本健太氏、株式会社毎日放送報道情報局報道センター記者横田舞氏の3名によるトークショーが始まった。

3名の登壇者には二つの共通点があり、一つは「理系の大学院で学んだ」こと、もう一つは、「そこから研究ではなく、「社会に広く伝える」という仕事を選んだことである。柗助教がファ



シリテーターとして、動画や写真を交えながら、2名の現在の仕事、学生時代の生活及び研究、大学在学中にやっておいて良かったこと、マスコミに進んだ理由について等、多様なテーマでのトークが展開された。時に会場からは笑いも起こり、登壇者・参加者ともに一体となった和やかな時間が刻まれた。



最後に質疑応答がなされ、学生、生徒、児童から次々に積極的な質問がなされ、3名の登壇者からの分かりやすく丁寧な回答を真剣な面持ちで聞いていた様子が特に印象的であった。

新島襄のラットランド・アピール 150周年記念ツアーのお知らせ

1874年10月9日、アメリカ合衆国ヴァージニア州ラットランドのグレイス教会 (Grace Congregational Church) におけるアメリカン・ボード (伝道団体) の年

次大会の最終日。留学を終えて宣教師として帰国する直前、新島襄は大勢の会衆の前で、キリスト教主義学校を日本に設立するという志を熱く語り、約5,000ドルの寄付の約束を得て、それが同志社の礎となりました。新島のラットランド・アピールから150周年にあたる2024年10月13日(日)に、グレイス教会において、記念礼拝を執り行います。

・期間：2024年10月10日(木)～10月15日(火) 4泊6日

・旅行代金：575,800円＋燃油サーチャージ
及び国内外空港税、他

<https://150th.doshisha.ed.jp/150th-info/detail/256>



ハリス理化学研究所研究発表会を開催

大学

2023年11月4日（土）、京田辺キャンパス恵道館において、ハリス理化学研究所研究発表会を開催しました（共催：同志社大学理工会）。

開会に際し、研究発表会実行委員長・秋山いわき生命医科学部教授による挨拶があり、引き続き北岸宏亮理工学部教授による『同志社発で世界初！～一酸化炭素中毒の治療薬の開発～』と題した公開講演会が開催されました。本講演では、北岸教授が本学において長年にわたり研究開発してきた人工ヘモグロビン化合物である hemoCD について、その開発の経緯が紹介されました。さらに、建物火災等で頻繁に発生する一酸化炭素中毒に対して hemoCD が治療薬として有効であることや、救急救命用医薬品として社会実装するための将来展望が述べられました（※）。



講演中の北岸宏亮教授



講演会場の様子

ハリス理化学研究所

※本研究に基づくプロジェクト「世界初の一酸化炭素中毒に対する解毒剤及び当該技術を活用した他のガス中毒の解毒剤の開発」は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）「大学発新産業創出基金事業（プロジェクト推進型 起業実証支援）」の2023年度新規プロジェクトに採択されています。

講演会後は、北岸教授、

榎太一ハリス理化学研究所

助教、鈴木祐太助教、理

工学部・理工学研究科OG

によるトークセッションが

行われました。本セッション

では、北岸教授の公開講

演会発表資料を題材とし、

科学研究を一般に広く伝え

る「サイエンス・コミュニ

ケーション」の方法や考え方について、科学者と一般市民

の考え方のギャップ等を取り上げた議論が繰り広げられま

した。セッションの終わりには、ハリス理化学研究所所長・

出口博之理工学部教授による総括が行われました。

その後は4つの会場に分かれ、文化情報学部、理工学部、

スポーツ健康科学部、グローバル・コミュニケーション学

部、ハリス理化学研究所所属教員による助成金成果発表、

ポスター展示による部門研究成果発表、創造科学教育夏期

研修報告会等のプログラムが展開されました。



トークセッションで解説する榎太一助教

発表会終了後は、

日糧館に会場を移し、

教職員、学生及び一

般参加者が一堂に会

しての懇親会が行わ

れました。和やかな

雰囲気の中、あっと

いう間に時間が経過

し、最後は、円陣を

組んでの Doshisha

College Song 合唱

で締め括られました。



懇親会場の様子

【付記】ハリス理化学研究所では、次の行事を予定して
います。みなさまのご参加をお待ちしております。

◆ 8・9月 ・ 創造科学教育夏期研修

・ 加藤与五郎実験教室

◆ 11月 ・ 創造科学教育夏期研修報告会

・ ハリス理化学研究所研究発表会

◆ 年4回 ・ ハリス理化学研究報告刊行

FROM NOW ON - 地球をトク equality

女子大学

学芸学部メディア創造学科教授

高木 たかぎ

穂子 ほりこ

FROM NOW ON イベントのデザインを通じ、 人類の地球での存続を自分ごととする

『人類は地獄の門を開けてしまった』国連事務総長であるアントニオ・グテレスは、2023年9月にニューヨークで国際的な連合を前に演説した。『地獄の門』は、既に世界中で起き出している気候変動・異常気象による災害のことを指す。

パンデミック、不景気、戦争、犯罪などのニュースが重なる日々、どのような形でいつ訪れるか不明な環境問題による災害や気候変動は、ついつい後回しにする一方、状況は刻々と悪化している。

アメリカの現代作家であるジョナサン・サフラン・フォアはこの現象を“crises of imagination”と名付けている。私を受け持つ授業やゼミで取り上げているこのテーマに、

カンファレンスという形で様々な分野の視点を取り入れ、学生と共に学びたいという思いから、2022年度に始めた企画をこれから紹介したい。

1日のミニカンファレンス

クリスマス1週間前の日曜日（2023年12月17日）、1日限りのカンファレンス「FROM NOW ON」が開催される。この企画は、同志社女子大学学芸部部の3学科（メディア創造学科、国際教養学科、音楽学科）の学生が履修できる「ジョイントプログラム」に基づいている。

学芸学部に所属する学生が1年次から受講できるこの授業では、学科を超えてのグループワークによるイベント企画・運営方法を学ぶだけでなく、現21世紀の課題に対してどのような立場があり、どのように議論できるのかも学ぶ。更に問題意識を持った上で、他者にどのように情報共

有するかを考えるきっかけともなる。

タイトルに込めた思いとプログラム

カンファレンスのタイトルである「FROM NOW ON」は「これから」を意味し、過去の誤りや未練を悔やむことよりも、未来に目を向け、現在の行動を改善する姿勢を取るよう訴えている。環境問題を軸とし、1年目の2022年度は誰もが1日3回とはっている食事の選択が地球に与えている負荷をテーマとするイベントであった。2年目である今年度は、女性差別・ジェンダー差別と環境問題の関連性について学び、トークゲストには3名の専門家を招いた。Nandita Bajaj 氏（人口と地球環境、インド・カナダ）、Luisa Mok 氏（SFとデザイン・フィクション、香港）、小松正史氏（音と社会包摂、京都）の講演により環境とジェンダーの関連性について多様な視点から共に学び、一緒に考えた。また、音楽学科の松下悦子教授による歌唱や、環境・ジェンダーに関する展示会やゲーム、ワークショップなども開催した。

2024年度の3年目は、この人類の課題を解決する為に欠かせない「コミュニケーション」を題材とし、高木が担当するジョイントプログラムは完結する。



「食」について考える探究的な学び〜 School Meals Project 〜

中学校・高等学校

英語科教諭

反田 任

1 授業デザインについて

中学校では今年度、中学1年生で複数の教員がグループになって探究的な学びを計画し実施するという事に取り組みました。私のグループは英語、社会、数学、理科、保健（養護教諭）担当の教員からなる構成でした。中学1年生の英語ではTime Zonesという教科書を使用しています。その中に各国のSchool Mealsについての話題が出てきます。今回はそのテーマを取り上げ、探究的な学びの授業デザインを考えました。

まず、週1回の授業（担当は8クラス）でどのような流れで授業を展開するか、次に述べる5つのポイントを視野に入れながら、授業をデザインしました。

① グループの担当教員5名が授業にどうかかわるか

授業内で担当教員からそれぞれの専門分野の視点から話をしてもらう場合、8クラスにわたる時間割変更は困難で

あることから担当教員が10分以内の「アドバイスビデオ」を制作、生徒に見てもらうことにしました。

② 学びの時間をどう確保し、デザインするか

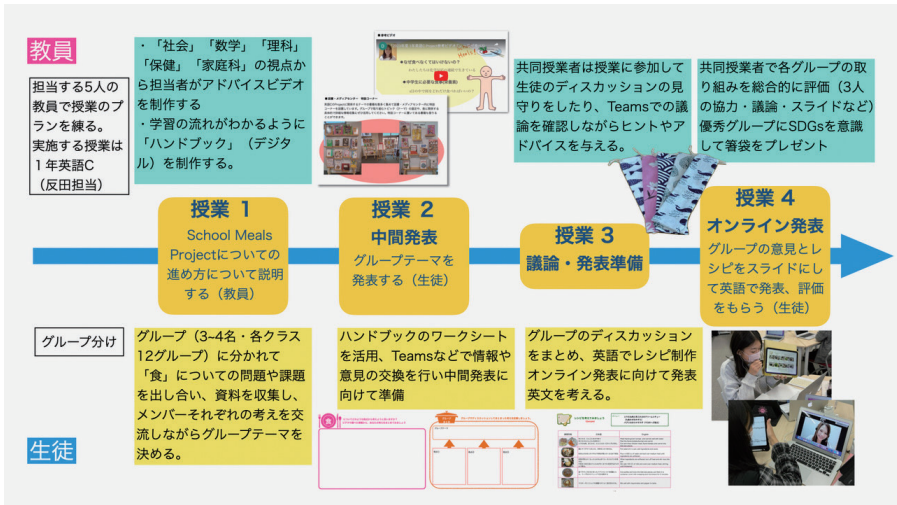
探究的な学びを保証するために、授業時間だけでは不十分であるため、TeamsやKeynoteの共同制作を活用しながら、グループ内の情報共有やプレゼンテーション制作を進めました。

③ 探究的な学びの手順を示し、学習に見通しを持たせる工夫をどうするか

ブック（PDF、Epub形式）を制作し、生徒に配信して学習目標・内容・手順などがわかるガイドとしました。

④ 学習内容を一人ひとりが理解し、自分の学びとするグループで決めたテーマにもとづく調査をベースに自分

たちが考える理想のSchool Mealのメニューを考え、レシピを制作します。さらにグループでそれらを統合し、発表スライドにまとめます。



授業の流れ

⑤ 発表の方法と評価 (学習の振り返り)

一対一でネイティブ講師と取り組むオンライン英会話のレッスン (25分) を活用し、発表内容を英語で発表します。オンラインの講師の先生からは、プレゼンテーションの内容について英語で質問が出され、返答も行います。(授業の流れについては、ページ上段の図を参照)

2 ICTと探究的な学び

探究的な学びにICTの活用は欠かせないものです。情報収集は言うまでもなく、グループ内での情報・意見交流、教師からのアドバイスやプレゼンテーションスライドの共同制作に活用しました。情報や意見の交流の場としてのTeamsの活用は授業と授業の間のシームレスな学びにつながりました。教室 (授業) だけでなく、時間・空間を超えて、グループのメンバーと繋がりが、学ぶことができました。また生徒たちは共同授業者の制作したビデオを何度も見返すことで学習内容の理解がより深まりました。また、プレゼンテーションを説得力のあるものにするために、データを活用するなどの工夫もみられました。

このようにして「食」について考え、「健康」、「伝統食」「食品ロス」「食料の流通問題」「環境と食」「食品アレルギー

「」などのテーマをグループで決めて調査し、その調査にもとづいて School Meal のメニューを考え、分担して調理し、レシピを仕上げました。

3 中間発表と最終発表

中間発表では各グループで調べた内容をもとに、各グループが取り組むテーマを発表、最終発表ではグループでまとめた内容とレシピについて英語で発表しました。

中間発表ではグループのチームワーク、最終発表では個人の英語と発表する力が試されましたが、どの生徒も真剣に取り組んでいました。

特に英語で発表する前には、AI発音チェックアプリも活用し、英語をスムーズに発音する練習も行いました。



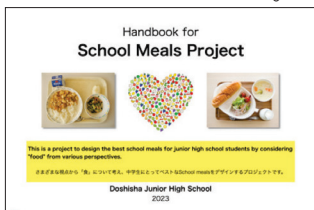
中間発表と最終発表の様子

4 生徒が主体的に学ぶ環境づくり

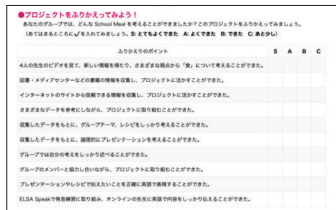
今回、5人の教員で協働して取り組んだ授業は教科横断型の授業であり、またSDGsや環境問題、STEAMなどさまざまな要素を含むものでした。また生徒の成果物であるレシピには生徒のさまざまな考えがやアイデアが込められていました。「オープンエンドの問い」によって、生徒の思考力、創造力を育むことができたのではないかと思います。

また、ハンドブックによって、「学びの目標」を明確にし、ICTを活用することで、生徒が常に学ぶことができる環境を構築し、深い学びに繋げ、さらに英語で発表し、学校内外の人からの評価を受ける流れがデザインできます。

今回の授業実践が教科横断型の授業は他教科との調整が難しいという点をクリアする一つの方法として参考になればと思います。



制作したデジタルテキスト



振り返りシート

雪不足に負けるな！ 同志社香里中学・高校スキー部

香里中学校・高等学校

体育科教諭

スキー部顧問

竹田 たけだ

幸平 こうへい

同志社香里スキー部の歴史

私が生徒として同志社香里中学校に入学し、スキー部に入部したのが53年前でした。中学1年生の私にとって、高校3年生の先輩は本当に大きく見えました。その後、教員として学校法人同志社に入社し、同志社香里中学校・高等学校配属、同時にスキー部顧問となり37年が過ぎ、現在に至っています。

同志社香里スキー部自体は今から61年前、1962年に産声を上げました。当時はスキーの好きな生徒と教員が冬休みにスキーをしに山に行くというレベルの研究会からのスタートでした。徐々に部員も増え数年後にはクラブに昇格し、志向も競技志向に変化して大会に出場しました。毎年、大阪、近畿、全国を目指す競技クラブとして代表選手を送り出しながら今に至っています。大阪府高校選手権

においては男子の部で過去72回の開催中、総合で現在の14連覇を含む46勝、2000年より共学化し、併設した女子の部も23年間で総合6勝、近畿大会においても過去総合7勝と押しも押されもしない名門スキー部に成長しています。

スキー競技について

一般的にスキーというと、華やかなBGMのかかるスキー場で白い雪にまみれながら楽しく滑って、疲れるとレストハウスでお茶を飲んで過ごす、夜は宿屋や温泉街でアフタースキーを楽しむといったイメージがあると思います。同志社香里スキー部の目指す競技スキーはそういったイメージとはかけはなれています。早朝からリフトが止まるまで、指定された競技コースにポールで制限されたコースを設定し、吹雪の中でも競技用の空気抵抗の少ない、体にび

ったりとしたワンピースを着て、ひたすらタイムアップを
目指して滑り込む、夜はミーティングとスキートのチューン
ナップに明け暮れるといった生活を送ります。また、クロ
スカントリー競技もあり、これは3〜15kmの野山に設定
されたコースを4cm程度の幅の細い専用のスキーで走りタ
イムを競います。かなり過酷な競技でゴールした選手の顔
にはよだれがツララのように下がっていることもあります。
このように一般のスキーヤーとは一味も二味も違ったスキ
ーになっています。

雪なし県におけるスキー部の意義

過去に同志社香里の中でもスキー部に対する風当たりは
順風なものではありませんでした。『雪なし県の大阪府に
なぜスキー部なんかが必要なのか』、『三学期に大会が集中
してほとんど学校にこられないじゃないか』、『金食い虫』、
『たった何日間だけの競技のために雪のない時期に延々
と走る意味があるの?』……。これらの言葉はまさにそ
の通りで、季節競技であるスキーは当然冬しかできず、大
会も冬に集中し、近隣府県において日帰りで実施される他
の競技とは違ってどうしても宿泊を伴い、同時に多額の費
用も必要になってきます。ただ、スキー競技に触れ、スキ

ーの楽しさを知っていただければ、これらの言葉が無為な
ものであることがわかっていただけたと思います。自然を
相手にする競技の厳しさ、理不尽さの中で多くの犠牲を払
いながらも一生懸命にトレーニングを重ね大会に向かって
いく生徒たちは、平穏な日常を大阪で過ごしている一般の
生徒と一線を画す何かを得ていると感じます。また、同志
社香里にはスキー部のように中高6年の各年代の生徒が一
緒に活動しているクラブが複数存在します。縦の関係が希
薄になりつつある昨今、こういったクラブで過ごすことは
非常に得難い6年間を過ごすこととなっています。上級生
は自分のことだけではなく、下級生の技術指導だけでもと
どまらず、生活から安全管理までも目を配ります。下級
生は自分がクラブに対して貢献できることを一生懸命努力
するといった伝統が生まれています。くわえて、長期間の
宿泊を伴う共同生活で得られる一体感や規律は生徒たちの
これからの大きな影響を与えていると感じます。

多くの犠牲と学校、保護者その他多くの人たちの協力が
ないと成立しないスキー競技ですが、選手達に私が常に言
っているのは『愛される選手になれ』という言葉です。こ
の言葉は他校の先輩監督さんの言葉だったのですが、選手
として一番大切なことだと思っています。勝利ももちろん

大事です。しかし、自分勝手に周りに気を使えない、感謝の気持ちのない選手では誰も共感も応援もしてくれません。スキーといったある意味特殊な競技において、生徒たちにとって大切な言葉と思っています。

スキーを取り巻く環境とこれから

ここ数年、スキー競技は地球温暖化の影響で、予定されていた大会が中止になったり、十分な練習環境が整わないなど非常に深刻な状況に置かれています。兵庫県でおこなわれている近畿高校選手権もここ5年で雪不足のため3度中止されています。また、スキーブームも過去の話となり、スキー客の減少に伴い、スキー場の閉鎖も相次いでいます。宿泊費や用具価格もどんどん値上がりし、競技を続けるには決して良い環境ではなくなっています。こういったことも影響し、近年ではスキー部に入学してくる生徒も少なくなってきたのが現状です。

今後、スキー部、ひいては「スキー」は一体どのような状況になっていくのでしょうか。このまま尻すばみでなくなっていく運命にあるのでしょうか。あるいは形を変えた環境の中で生き残っていくのでしょうか。

しかし、私はスキーという生涯楽しめるスポーツがこれ

からも消えることなく盛んになっていくと信じています。とくに自然を相手に真っ白い雪の中、必死で奮闘するスキー部の生徒たちがスキーを通して多くのことを学び、将来にわたってかけがえのない財産として成長していく姿がこれからもずっと続いていくことを願ってやみませ



DOSHISHA KORI SKI TEAM

海外語学研修の再開と新しいプログラムの導入について

女子中学校・高等学校

教諭 林 昌美 はやし まさみ

海外語学研修の再開

新型コロナウイルスの影響で数年間中止が続いていた海外語学研修が、約四年ぶりに再開しました。中二・中三対象のオーストラリア語学研修、中三対象のニュージーランドチーム留学、アメリカヌエバ校派遣プログラム、高一・高三対象のイギリス語学研修を実施でき、本校の海外語学研修がやっと戻ってきました。

実際に日本とは違う国で、ホームステイを経験したり、現地校に通ったり、歴史的な場所を巡ったり、文化体験をしたりと、様々な経験をすることができました。自分の英語が伝わった喜びや、現地の方々と交流する喜びを感じ



イギリス Malvern Collegeにて

しながら、文化や考え方の違いにも気づくことができました。ホストファミリーとも多くの時間を共有し、英語だけではなく、国境を越えた人との繋がりを持つこともできました。今回得られた貴重な経験を、一人一人があらゆる形で未来へと繋げていくことを願っています。

ニュージーランドチーム留学の導入と実施

本校では、コロナ前からチーム留学の導入を検討していたものの、コロナの影響で中止が続き、二〇二二年度に初めて「ニュージーランドチーム留学」を実施することができました。チーム留学は、約三ヶ月ニュージーランドハミルトンで過ごすプログラムです。これまで本校では、二週間程度の海外語学研修をいくつか実施してきましたが、グローバル時代を見据え、現地校で一チーム過ごすという、より実践的な留学を導入することとなりました。プログラムの概要としては、語学学校にて約二〜三週間の英語研修、その後、伝統あるキリスト教主義の女子校である Sacred

国内語学研修の導入と実施

Heart Girls' Collegeに通います。現地の第一チームが始まる時期に通い始め、一ターム現地校で生活を送ります。英語を学ぶ世界各国からの留学生と共に過ごす語学学校での研修、ニュージーランドの現地校での生活を経験した参加者たちは、自らの力で様々な困難を乗り越え、大きく成長しました。この留学を通して広い世界を感じ、今後グローバルリーダーとして活躍してくれることでしょう。今年度も一月から三月までの日程で三名が参加します。生徒たちがどう成長して帰国するのか、三か月後が楽しみです。



語学学校での英語研修



現地校での学校生活

海外留学にとどまらず、今年度から新たに、東京で二泊三日の国内語学研修を導入し、実施しました。中学二年生と三年生の希望者が、このプログラムに参加しました。英語研修を実施したTokyo Global Gatewayでは、「アトラクションエリア」において、飛行機内、ホテル、店舗などの場面で、実際に注文したり、ホテル予約をしたりと、状況に合わせて実践的な英語表現を学びました。日本にながら、まるで海外にいるような体験ができ、わくわくしながら英語を使っている生徒たちの姿が多くみられました。また、「アクティブイメージジョンエリア」においてはダンスパフォーマンス、ニュース番組の制作、コマ撮り作品制作、多文化理解、ディスカッションなど様々なプログラムに参加し、「英語を学ぶ」のではなく、「英語で学ぶ」体験をしました。普段とは違う環境の中で、常に英語を使って過ごす体験が、参加者の英語学習への意欲を高めたと思っています。また、様々な国出身の先生方との出会いを通して、異文化や多様な考え方にも触れることができ、大変有意義な研修となりました。



ニュース番組の制作

総合的な探究の時間の可能性 〜同志社国際高等学校のとりくみ〜

国際中学校・高等学校

教頭 西田^{にしだ} 喜久夫

文部科学省の高等学校学習指導要領の中で、「総合的な探究の時間」の目標は、以下のように説明されている。

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを旨とする。

従前の「総合的な学習の時間」から今回の「総合的な探究の時間」に改編されるにあたって強調されたのは、「学習」と「自己の在り方生き方」の関係性、言い換えれば、学びが社会とのつながりを意識しているかということになる。

「総合的な探究の時間」は教科を越えた横断的なものであり、生徒の主体的な取り組みはもちろんであるが、生徒を主体的・対話的な学びに誘うための教員側の「主体的・対話的な」教材準備が求められている。

本校では2022年度から、学年ごと・学期ごとに学習テーマを設定し、「総合的な探究の時間」に取り組んできた。以下、2023年度のテーマの一部である。

高校1年 まちづくりについて
 高校2年 平和について
 高校3年 生きること

高1での具体的なものから、学年進行で抽象的な内容になり、より内省する機会が増えるものとなっている。外部からの講師を招いて知識を深める（例えば、今年の高校1年の二期には京田辺市の市長に来ていただいて、京田辺市や自治体の考える「まちづくり」という、普段自分たちでない視点から学んだ）とともに、その後の生徒間の活発な討論や発表を通じて、学びを共有し深化する作業を行う。ここまでは一つのパッケージである。

点数化しない学びであるが、この学習を通して生徒達ができるものは多いはずである。

6年生修学旅行 鹿児島・熊本方面

国際学院

初等部教頭 風間 寛
かざま ひろし

国際バカロレアのカリキュラムとリンクした 修学旅行

九月二十六日から三泊四日で、初等部六年生は九州方面へ修学旅行に出かけました。

国際バカロレアの初等教育プログラム（IB PYP）認定校である本校では、校外学習や宿泊学習のねらいと、「探究の単元」で学ぶ概念とを関連付けています。この修学旅行においても、ねらいの一つを「人類の進歩が与える自然界への影響について理解を深める」と設定しました。

さて、一日目は伊丹空港から鹿児島へ。最初に訪れたのは、この場所から数多くの若者が「神風特別攻撃隊」として、片道の燃料しか積んでいない飛行機で飛び立っていった知覧（鹿児島県南九州市知覧町）です。知覧特攻平和会館やほたる館、富屋食堂で、語り部の方のお話を熱心に聞

いたり、質問をしたり、また資料に見入ったり、メモを取ったりしながら、過去の戦争や平和について考える時間となりました。

二日目は新幹線で新水俣駅へ。水俣病資料館・総合研究センター、熊本県環境センターでは、水俣病や環境保全について、グループに分かれて見学しました。午後からは「山の中の海軍の町にしき ひみつ基地ミュージアム」を訪れました。ここは太平洋戦争中の一九四三年に建設された、人吉海軍航空基地であり、地下トンネルの中に作られた魚雷調整場





や兵舎豪、地下作戦室・無線室などがあります。子どもたちはここでも、地元の語り部の皆さんのお話を耳を傾けながら、ミュージアムの中や地下トンネルの中を見学していました。

三日目は、環境と自然について学びました。(株) ビツグバイオでは「B B菌」による水質浄化、(株) 日本リモナイトでは鉱物資源であるリモナイト(阿蘇リモナイト)を使った土壌改良・水質浄化の取り組みについて見学や体験をさせていただきました。

最終日は益城町にて、傾いた家屋や地表に現れた断層など、熊本地震の爪痕を見学しながら、地震の恐ろしさを肌

で感じました。その後熊本城の見学、最後に日本キリスト教団草葉町教会にて同志社ゆかりの「熊本バンド礼拝」を実施し、熊本空港から岐路につきました。

この修学旅行を通して、子どもたちは反戦平和に関すること、自然災害に関すること、そして熊本バンドに関することなど、多くのことを学びました。この経験を生かして、今後の探究の学習に生かしてほしいと思います。



台東大学附属小学校との交流

小学校

2023年10月17・18日、台湾の台東大学附属小学校（國立臺東大學附設實驗國民小學）から訪問団が来校し、同志社小学校の児童、教職員と交流を行いました。

台東大学附属小学校は、台湾南東部の台東県にある国立の小学校で、豊かな自然に恵まれ、原住民族文化が色濃く残る台東県は、芸術の街としても注目されています。

台東大学附属小学校と同志社小学校は、本校に近接する人間文化研究機構 総合地球環境学研究所とのご縁で2010年より交流が



始まり、2016年には人的交流協定締結に至るなど、10年以上積極的な交流を深めてきました。

今回は、コロナ禍を経て4年ぶりに、児童30名と教員6名が来校されました。

1日目は、本校の6年生児童と台東大学附属小学校の児童がグループで京都観光を楽しみました。英語と道草の授業で準備してきた手作りのパンフレットや会話用のメモを片手に、グループごとに散策しました。散策後は、同志社大学に集合し、



教諭
振本 ありさ
ふりもと



良心館食堂で昼食を共にしたり、キャンパス見学を楽しんだりしました。

2日目は、5・6年生が授業交流とクラブ活動を楽しみました。台東大学附属小学校の児童が本校の6年生に台湾原住民の文化を紹介し、一緒にブレスレットを手作りしたり、5年生が事前に羽子板に描いておいた絵に台東大学附属小学校の児童が色を塗り、その羽子板で一緒にはねつきを楽しんだりしました。また、お互いの町や人々の暮らしについて、英語ですごくをしながら紹介し合いました。

コロナ禍を経てようやく再開した交流行事。参加した児童からは、台湾の児童との個人的な交流エピソードが多く語られるなど、対面交流の意義を再認識した行事となりました。これを機に、引き続き様々な国際交流の再開を模索しつつ、本校の国際化教育の推進につなげていきたいと思えます。



中庭のクスノキ
(2022年度撮影)

新園舎に移転して3年目の幼稚園（シャロームハウス）。敷地内には、同志社大学・旧フレンド・ピース・ハウスから引き継いだ大木（銀杏・クスノキ：他）があります。中庭のクスノキもそのひとつでした。これからも長くこの地を見守っていくかと思われた大木でしたが、去年、木の表面にキノコが生え始め、木の寿命が残りわずかであること

幼稚園 中庭「クスノキ」の伐採 〜お別れ礼拝と遊歩道の設置〜

幼稚園

教諭

遠藤 えんどう

稚絵 ちえ

が判明しました。このままでは倒木の危険もあるとして、残念ながら伐採を決めました。

2022年11月。伐採が決まったクスノキを囲み、全園児でお別れの礼拝を行いました。これまでこの場所や沢山の人々を見守ってくれたことに感謝を捧げ、讚美歌を歌いました。子ども達はその様子が印象的であったようで、くちぐちに保護者に伝えたこともあり、保護者の方も大木の最後の姿を目に焼き付けておられました。

そして2023年8月、クスノキの伐採工事が終了しました。園庭から中庭が横断できるように、その場所に枕木を埋め、遊歩道ができました。中庭の遊歩道は子ども達だけでなく保護者の方に通っていただくことができ、園舎の中に新たな動きが感じられる空間となりました。残した大きな切り株の周辺には、小さな草花が芽を出し、子ども達にとって人気の場所となっています。



お別れ礼拝の様子
(2022年度11月)



幼稚園リチャーズホールから見る
伐採前のクスノキ (2022年11月)

幼稚園には新しい園舎とともに、歴史ある銀杏並木や旧門なども共存しています。引き継いだ沢山の大切なものを守りながら、同時に子ども達や保護者の方々、そして教職員が一体となって、新しい歴史を紡いでいくことができますようにと、この度の伐採を機に、思いを新たにしました。



2023年8月完成 中庭の遊歩道

同志社の 一貫教育

hitohito-Li

同志社一貫教育探求センター

所長 おおくぼ まさし
大久保 雅史

同志社の一貫教育の魅力を HPで発信

○同志社一貫教育探求センター（以下「センター」という。）は、幼稚園から大学までを擁する総合学園の強みを生かし、同志社らしい教育を探求すべく、

- ・建学の精神の深化
 - ・新たな学びの展開
 - ・同志社のブランド力強化
 - ・法人内情報の共有
 - ・同志社創立150周年記念事業との連携
- などを見据えて、様々な取り組みを検討・展開しています。

これらの取り組みの一つとして、本年4月からセンターのホームページで教職員や卒業生に同志社の一貫教育の魅力を語ってもらう対談動画をアップしています。

直近の企画としては、

同志社女子中学校・高等学校で心と体の大切な成長期を過ごされた卒業生である河本宏子氏（同志社大学文学部卒業、元ANA総合研究所会長）、安久詩乃氏（同志社大学心理学部卒業、株式会社堀場製作所勤務・アーチェリー選手）に在学当時の思い出や現在へつながるエピソード、その後の生き方への影響など、一貫教育から生まれたさまざまなお話を中村久美子同志社女子中学校・高等学校校長が伺いました。

河本氏は一貫教育ならではのメリットについて、「自分の学びのために時間を使えることです。本を読んだり、音楽に親しんだり、スポーツにも打ち込めます。受験を気にせず好きなことに費やす6年間は、振り返れば、人格形成にも大きく影響したように思います。大学進学時には受験をしていないことで知識不足ではないかと不安もありましたが、むしろ自分で自分の時間を使うことで身についた『自



センターホームページ

同志社の一貫教育

分で自分をマネジメントする』スタイルは、大学生から社会人になっても役立ちました」と当時を振り返りながら語られていました。

安久氏からは、「クラスメイトやクラブ活動の仲間との結びつきの深さです。お互いに最もいろいろなことを吸収して成長していく時期を共にした友人です。本当に宝物です。例えば、クラブ活動においては、中学1年生から高校3年生まで年齢の離れた生徒が共に活動します。人数の多いクラブ活動の中でいかに円滑にクラブを運営していくか、その中でどのようにして競技力を向上させていくのか。また、自分のやるべき役割は何か。顧問の先生やコーチ、同級生、ときには卒業したOGの力を借りて、チームの目標に向けた道筋を立てていく力を身につけることができたのではないかと考えています」というお言葉をいただきました。

企業人として、アスリートとして多方面で活躍されているお二人の人格形成のバックボーンには同志社の良心教育を礎とした一貫教育の成果を垣間見ることができ、感動を覚えました。対談は、センターのホームページに掲載しています。今後も引き続き様々な切り口で一貫教育の良さを広報していきますので、ぜひともご覧ください。

【同志社一貫教育探究センターのホームページはこちら】



同志社女子中学校・高等学校 黎明チャペルにて
左：中村校長 中央：河本氏 右：安久氏





同志社創立 150 周年記念募金

2025年同志社は創立150周年を迎えます。それを記念して、次の各学校の募金事業の総称として「同志社創立150周年記念募金」の名称を冠として付けています。以下の学校法人同志社並びに各学校の募金事業内容については、以下のHPでご確認いただければ幸いです。



<https://bokin.doshisha.ed.jp/index.html>

学校を超えた連携の支援

学校法人同志社

- 同志社創立150周年記念事業募金
- 新型コロナウイルス感染症に伴う在学生支援募金
- 同志社ルーム記念館プロジェクト・サポート募金



各学校の個別支援

同志社大学

同志社大学2025 ALL DOSHISHA 募金 (対象事業)

- ・リーダー養成プログラム運営支援
- ・グローバル化の促進支援
- ・高大接続プログラムの展開支援
- ・特定寄付奨学金
- ・育英型奨学金
- ・スポーツ活動充実資金
- ・文化系公認団体活動充実資金
- ・今出川校地新図書館建設 等



同志社女子大学

同志社女子大学サポーターズ募金「ぶどうの樹」 (対象事業)

- ・教育・研究環境の充実
- ・経済的困窮学生に対する奨学金
- ・寮生に対する生活支援
- ・グローバル人材育成
- ・学生の課外活動支援
- ・キャリア形成支援
- ・キャンパス緑化推進支援
- ・特定の学部・学科等支援 等



同志社中学校・高等学校

- 同志社高等学校教育研究協力資金募金
- 同志社高等学校教育施設建設資金募金
- 同志社中学校教育研究協力資金募金
- 同志社中学校教育施設建設資金募金
- 同志社中学校・高等学校給付奨学金募金



同志社香里中学校・高等学校

同志社香里中学校・高等学校
教育施設等整備資金募金



同志社女子中学校・高等学校

同志社女子中学校・高等学校
教育研究施設・設備整備資金募金



同志社国際中学校・高等学校

同志社国際中学校・高等学校
教育施設等整備資金募金



同志社小学校

同志社小学校教育支援
および施設・設備整備資金募金



同志社国際学院

同志社国際学院初等部教育支援
および施設・設備整備資金募金



同志社幼稚園

同志社幼稚園教育援助募金



ハリス理化学館同志社ギャラリー展示ご案内

ハリス理化学館同志社ギャラリーは、創立者新島襄の志と同志社の歴史等を資料で紹介する展示施設です。ハリス理化学館は、J.N.ハリスの寄付をもとに1890（明治23）年に竣工し、永らく同志社における理化学教育の拠点となった建物です。現在、国の重要文化財に指定されています。

【企画展】

ハリス理化学館同志社ギャラリー第31回企画展
同志社大学同志社社史資料センター 開設20周年
「同志社の家計簿—そのあゆみを支えた財政の記録—」

期 間：2024年2月27日（火）～4月21日（日）

場 所：2階 企画展示室

主 催：同志社大学同志社社史資料センター

内 容： 今から150年前、1874年10月9日、同志社の創立者・新島襄は、アメリカのヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開催されたアメリカン・ボードの第65回年次大会で、日本に学校を設立したいと訴えて、約5,000ドルの寄付の約束を得たと言われます。同志社最初の収支の記録「同志社出納簿」にこの寄付金が明記されています。ここから同志社の財政の歴史が始まりました。

財政とは学校の歩みを決定付ける要素の1つです。財政の安定は学校の安定的経営に繋がり、一方で、財政難は全く逆の状況を引き起こすことは周知のとおりです。こうした財政状況は学校の進路選択にそのまま影響を与えます。同志社の場合、その歴史上どのような影響があったのか、財政の歴史をヒントに紐解きます。

Received		Paid		Exp.	Said
Jan 1 st	On hand from American friends 5,000.00	1	Bought school land	550	00
		out.	Davis salary	100	00
		Nov.	" .. "	100	00
		"	" .. rent	10	00
		"	" .. Shikoku	40	00

「同志社出納簿」（部分）1875～1879年

【入 場 料】 無料

【開館時間】 10：00～17：00（最終入館 16:30まで）

【閉 館 日】 日曜日（企画展開催中を除く）・月曜日・祝日・GW・夏期休暇中の一定期間・年末年始

【場 所】 同志社大学 今出川キャンパス

※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関をご利用ください。



【お問合せ先】

ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室

HP： <https://harris.doshisha.ac.jp/>

E-mail： ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp

TEL：075-251-2716 FAX：075-251-2736



新島旧邸公開のお知らせ

新島旧邸の敷地には、幕末まで京都大工頭中井家の屋敷があり、明治初年には中井屋敷を堂上華族の高松保実が所有していました。1875（明治8）年11月29日、新島襄は、この高松邸の半分を賃借して仮校舎とし、生徒8名で同志社英学校を開校しました。翌年、英学校は薩摩藩邸跡地の専用校舎に移りますが、その後、新島は高松邸を購入し、自宅を1878（明治11）年に建築しました。これが、現在の新島旧邸です。同志社発祥の地に建つ新島旧邸を、同志社の建学の理念を体感する場として公開しています。

【公開期間】 4～7月、9～11月、3月

- ①通常公開 毎週火・木・土曜日
（祝日は除く、2024年4月28日～5月6日は閉館）
- ②特別公開 春の特別公開 4月1～5日
オープンキャンパス 8月3、4日【仮】
秋の特別公開 10月1～5日
ホームカミングデー 11月10日【仮】
創立記念日 11月29日
卒業式当日 2025年3月20～22日

※公開日の詳細はHPをご覧ください。

<https://archives.doshisha.ac.jp/archives/>

【公開時間】 10：00～16：00（入館受付は15：30まで）

- 【見学対象】 ①通常公開
旧邸周囲から建物内部を見学（建物内部には入場できません）。
②特別公開
旧邸周囲および建物内部（母屋1階と付属屋）に入場できます。
※旧邸建物内に一度に入れる人数は20名程度とします。

【入場料】 無料

【場 所】 京都市上京区寺町通丸太町上ル松蔭町
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。

【団体見学申込】 10名以上の団体は、予約が必要です。団体予約は、見学日の1週間前までに電話・FAX・E-mailにて下記にお申し込みください（電話受付は10：00～16：30）。



お問合せ先

ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室

HP：<https://harris.doshisha.ac.jp/>

E-mail：ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp

TEL：075-251-2716 FAX：075-251-2736



同志社女子大学史料センター 第27回企画展 新島襄と同志社の人々—影月堂コレクションより—

「影月堂コレクション」は、同志社女子大学表象文化学部日本語日本文学科の吉海直人特任教授が永年にわたって収集してこられた史料群である。今回、このコレクションの中の同志社の歴史に関するものが、一括して同志社女子大学史料センターに寄贈された。その中には、山本覚馬の『管見』の写本といった重要な史料も含まれている。このコレクションから、同志社の創設者である新島襄、その夫人の八重、八重の兄であり新島の無二の協力者であった山本覚馬、さらにはその後の同志社にかかわった人々についての史料を紹介する。

期 間：2023年11月17日(金)～2024年7月31日(水)

時 間：10：00～16：00

閉室日：土・日・祝日および5月1日～2日

(ただし、4月29日、7月15日は開室しております。)

場 所：同志社女子大学史料センター

(今出川キャンパス

ジェームズ館1階展示室)

主 催：同志社女子大学



お問い合わせ：同志社女子大学史料センター

〒602-0893 京都市上京区今出川通寺町西入

TEL：075-251-4200 FAX：075-251-4201

E-mail：shiryu-i@dwc.doshisha.ac.jp

同志社校友会からのお知らせ



同志社設立10年後の1885年に「アルムニ会」として発足したのが、同志社校友会の始まりです。主な目的は、卒業生の親睦と大学との連携を通じた学生の支援です。現在、約36万人の会員となり、国内はもとより、各国に支部があります。

2020年春からコロナ禍で、経済的に困窮している学生支援のため、同志社大学と連携して2020年5月から6月にかけて商店街やスーパーで利用できる食生活応援クーポンを配布し一人暮らしの食生活サポートを行う事ができました。

その後も、コロナ禍において「同志社校友会ランチプロジェクト」として学内の食堂において、200円の補助をすることで、学生の経済的な負担を軽減し、2022年12月には累積で約33万人の支援ができました。

2023年度になり大学の授業等がコロナ前の状態に戻ることに対応し、学生への新たな食支援を実施しております。栄養バランスの取れた食事を通じて学生が健全な生活ができるように支援をしています。

今後も、様々な学生への支援を継続し、充実した学生生活を送ってもらえるよう対応してまいります。

活動の概要

①卒業生と繋がる同志社校友会

2023年12月現在、国内に48の支部、海外に36の支部が存在し卒業生に対して、現地の校友会がサポートをしています。

連絡先は、QRコードまたは、 で検索してください。



②大学と繋がる同志社校友会

同志社大学が掲げるリーダー養成、グローバル化への支援、「同志社大学2025 ALL DOSHISHA募金」の推進など大学と連携した活動を行っています。

③学生を支える同志社校友会

「同志社校友会奨学金」、「同志社スポーツ奨学金」、海外留学生支援として「グローバル人材育成奨学金」など各種給付型の奨学金制度を通じて教育と学生生活の充実がはかれるサポートを行っています。

同志社校友会本部事務局

TEL 075-251-4393

E-mail info00@doshisha-alumni.org

同志社同窓会の歩みと年間行事・事業



同志社同窓会は1876年に同志社女学校が創立された17年後の1893年、96名の母校愛にあふれた卒業生と有志らにより設立されました。制定された規約の第1条には「会員たるものは相互の交誼を密にし且同志社女学校の益を図るを目的とする」と記されています。

女学校の創設期、アメリカン・ボード（支援はウーマンズ・ボード）から派遣された女性宣教師らとともに過ごす寄宿舎での生活を通して女生徒たちはキリスト教の価値観、生活様式を身につけ【自立した女性とは神の恵みに感謝し、他者に仕える喜びを見出す、すなわち「地の塩・世の光」（マタイ5：13）となる女性】と教えられました。

深い慈愛をもって育まれた卒業生たちは卒業後も良き姉妹として年に1度「母校に帰る日」を決めて集まり、礼拝をもって総会を持ち、年会（大同窓会）を開いたとの記録が残っています。その会では、教職員と生徒らも共に集まり大親睦会として余興なども行われたようです。また、現在の『同志社同窓会報』の前身である『同志社女学校期報』は同窓会の創設事業として発行されました。その中で、母校の教育のレベルアップの為に必要不可欠な書籍や校舎維持費など、必要な資金を得るために同窓会挙げて募金活動を大々的に行っていたことが記載されています。

同志社同窓会は同志社を愛し、女学校と女生徒また卒業生らをご自分の分身のように愛し抜かれたM.F.デントン先生から多大な感化を受け、その教えを守って様々な活動を続けています。母校への寄付金を集めるために、と教えてくださったバザーは同志社同窓会の大切な行事の一つとなっています。

2023年に創設130年をむかえた同志社同窓会は、女子大学、大学院、女子高校及び中学、旧制女専、高女の卒業生・修了生によって構成されており、62支部（国内59支部、海外3支部）に95,000名を超える会員を有しています。また、本部は役員30名、常任幹事20名、監事2名のほか、各学年代表の幹事からなり、組織として同志社同窓会の中に同志社女子大学《Vineの会》と同志社女子中高同窓会「同志社ゆかり会」が置かれています。

年間活動と行事・事業

春（5月）と秋（9月）の幹事会

7月 同志社同窓会総会

3年に1度は総会の前日に支部長会開催

10月 バザー開催

11月 全同志社リユニオン（法人同志社、同志社大学、校友会と共催）

同窓会ルームで催物

12月 ミス・デントン永眠記念墓前礼拝（相国寺 長得院の墓前での礼拝）

2月 新島襄生誕記念会（学校法人同志社、同志社校友会と共催）

3月 女子高、女子大学卒業生対象入会式

その他、奨学金贈呈や会報の発行、同窓会館の運営（紫苑会講習としてヨーガ、華道、茶道、料理教室を開講）、貸室、女子中高購買・食堂の運営

* ホームページ <https://www.dojo-doso.org/> E-Mail dojodoso@juno.ocn.ne.jp

2024年は、能登半島地震と羽田空港衝突事故という衝撃的な出来事から始まりました。正月気分を味わえないままテレビのニュースを見守った方も多かったのではないのでしょうか。その後、宇宙開発分野で明るいニュースが続きました。1つは、無人探査機SLIMが日本初の月面着陸に成功したこと（1月20日）、もう1つは、JAXAと三菱重工が開発したH3ロケットが無事に衛星軌道まで到達したことです（2月17日）。SLIMについては、(体

操競技だと減点されそうな)着地の姿勢が話題になり、さらにソーラーパネルが太陽に向けておらず電力が正常に供給できないといったニュースにハラハラさせられました。

本号の特集は、「同志社と宇宙」です。座談会では、新学長の小原克博先生、SLIMの撮影で有名になったSORAQを開発した生命医学部の渡辺公貴先生、そして、同志社OBのJAXAの足立寛和氏に月面着陸の成功秘話や今後の宇宙開発の展望について語っていただきました。タイムリーなテーマですし、同志社の研究力を十分に味わっていただければと思います。

個人的に興味を持ったのは、座談会で出てきた「第1宇宙速度」という言葉です。その昔、物理で受験したことがあり、言葉は覚えていたのですが、内容はすっかり忘れていました。この原稿を書くにあたり、「第1宇宙速度」と「第2宇宙速度」について学び直しました。「第1」は、遠心力と重力の均衡条件から導かれること、「第2」の方は、運動エネルギーと位置エネルギーを用いたエネルギーの均衡条件から導かれることが分

かりました。衛星軌道に到達するための速度（第1）と地球の重力圏から脱出するための速度（第2）、同じ速度でありながら、次元の異なる視点から導かれている点に神秘を感じました。

本号も社員ならびに同志社にご縁のある方々から素晴らしい原稿をお寄せいただきました。ご協力に心より感謝申し上げます。また、編集作業にあたり、広報課の首藤右紀さんには大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

（宮澤）

●同志社広報委員会小委員会委員

○印委員長

- | | |
|-----------------------|-------|
| ○大学経済学部教授 | 宮澤和俊 |
| 大学神学部教授 | 三宅仁行 |
| 大学文学部准教授 | 杉浦秀孝 |
| 大学社会学部教授 | 鶴飼孝一 |
| 大学法学部教授 | 長谷川幸 |
| 大学商学部教授 | 西村年子 |
| 大学政策学部教授 | 井村貢雄 |
| 大学文化情報学部助教 | 田中隆生 |
| 大学理工学部教授 | 土屋隆 |
| 大学生命医科学部准教授 | 日和岡義貴 |
| 大学スポーツ健康科学部教授 | 神山弥文 |
| 大学心理学部教授 | 福山諷 |
| 大学グローバル・コミュニケーション学部助教 | 諏訪渡辺 |
| 大学グローバル地域化学部助教 | 影山彦 |
| 女子大学学芸学部教授 | 影山優 |
| 女子大学現代社会学部准教授 | 鳥渕奈和 |
| 女子大学薬学部准教授 | 松元加美 |
| 女子大学看護学部教授 | 松元英子 |
| 女子大学表象文化学部准教授 | 三辻純子 |
| 女子大学生活科学部准教授 | 藤本栄一 |
| 中学校・高等学校 | 鎌田山田 |
| 香里中学校・高等学校 | 内山田 |
| 女子中学校・高等学校 | 磯田信行 |
| 国際中学校・高等学校 | 貴志浩 |
| | 川嶋久佳 |
| 小学校事務長 | 堀岡利絵 |
| 国際学院事務長 | 遠藤稚 |
| 幼稚園教諭 | 柳井下 |
| 法人事務部長 | 木中裕之 |
| 大学広報部長 | 木田中 |
| 法人事務部校友同窓課長 | 木中原 |
| 大学広報部広報課長 | 中野健 |
| 女子大学広報部広報室広報課長 | 前野 |

※職名は同志社広報委員会小委員会発足時のものです。

●編集協力 アルカダッシュ

●同志社時報の申し込み

- ・送料（ゆうメール着払い：1冊241円）のみのご負担でご講読いただけます。
- ・お申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。
- ・宛先 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学広報課

同志社時報 第157号
 編集人 宮澤和俊
 発行人 八田英二
 発行 学校法人同志社
 同志社大学広報課同志社時報係
 電話 (075) 251-3120
 印刷所 株式会社あおぞら印刷
 2024年4月1日発行